

---

# いつのまにか

海来

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

いつのまにか

### 【Nコード】

N1586D

### 【作者名】

海来

### 【あらすじ】

「こっちみて」の続編になります。お互いの気持ちを確認合ってから、数ヶ月。忙しさに追われて、初デートもままならなかった勇と鈴。やっと訪れた初デートですが……

「1」 服の着方が……（前書き）

初デートにきて行く服がない。

勇は、ジャージで過ごす派というか、おしゃれには一切興味のなかった男の子です。  
どうする事やら。

いつのまにか

## 「1」 服の着方が……

季節は、やっと冬になった。

今年は何故か夏が長くて、秋もそこに冬が来た感じがする……のは俺だけじゃないはずだ、きっと。

そこでだ、俺は慌てて冬の服をしまつてある衣裳ケースを引つ繰り返すはめに陥ってる。

何故って？ 昨日が夏で、今日が冬になった訳じゃないだろうって？

そりゃ当たり前でしょう。

だったら、いつもの服を着ればいい？

そうなんだよな、いつもの服って、それが問題なんだよ。

俺は、いつもの生活の中で、学生服以外はジャージで過ごしてる。だって、そうじゃないか！ 普段の日は、学校と空手の道場に行つて帰るだけ、週末は空手の道場に行つて帰るだけ。

そんな俺に、普段着が、ジャージ以外必要になることなんてないじゃないか。

「やっぱ、ねーわ」

衣裳ケースの中を見たけど、冬のジャンパーや厚手のジャージ以外に入ってるものなんて存在しない。

「は〜どうするよ、勇……これじゃあ、鈴ちゃんとデートに行けネーって」

そう、俺は念願の鈴ちゃんとの初デートを明日に控える身なんだよ。

友達に聞いた話だと、初デートにジャージは最低だって言われて、こうして探してるって訳。

でも、初めから持ってない物を探してるって事自体、無駄だよな

あ……はア……

俺は、部屋一杯に広がったジャージやジャンパーの上に、大の字

に寝そべった。

ガチャッ!

「勇? やっあんたは、もう服の上に寝たりしなでよっ。くしゃくしゃになるじゃない! このバカ息子」

ボコッ

「イッテエ〜! 蹴るかフツ〜。それにイ、母さん、入るときはノックしろって言ってるだろーが」

俺の母さんは、結構暴力的だ。

まあ、痛いっても大したことは無いから、加減はしてるんだろうけど、いまだに高校生になった息子二人を殴っている、勿論いままいに蹴る事もある。

「何言ってるのよ。ここは、母さんと父さんの家です。どこに入るのも勝手なんだからね。覚えておきなさい」

「有り得ねーし、子供のプライバシーは無いのかよ、この家は」

そう言った俺を、ジーツと見つめた母さんは、その後ニヤ〜と笑った。

「夜には、一人にしてあげてるでしょう。一人じゃないと出来ない事は、その時にしなさい」

母さん、あんた……その笑顔で何を言ってるんですか……それって……深く考えるのはよそう、また、からかわれるのがオチなんだ、この人相手には。

俺は、無言で起き上がると、ジャージを畳み始めた。

ガサッ

いきなり俺の手元に、けっこう重量感のある紙袋が落ちてきた。「何?……」

俺が母さんを見上げると、さっきよりももっと満面の笑みを浮かべた母さんが、俺を覗き込んでいた。

「勇、明日は頑張つてね。鈴ちゃんと初デートでしょう」

「なっなっ何で? あっ鈴ちゃんママ?」

鈴ちゃんは、自分のママに何でも話をする子だ。

明日の事も、報告済みってことか……

「あんだ、着て行く服なんてないでしょう。鈴ちゃんに恥はかかせられないから、母さんがあんだのデート衣裳をそろえて来ました」  
俺は、慌てて袋を開けた。

胸にクロスと蛇が絡んでるプリントのＴシャツに、ウールぽいチエックのシャツ、ダメーजीズ、ダウンのジャンパー（中はワタかもしれない）、それにブーツまで。

「かつか・あ・さ・ん？ 大丈夫？」

「何が」

母さんの声が、一瞬で不機嫌に変わった。

「頭……いや、えっと、じゃなくて、お金イッパイ使ったんじゃねーかと」

母さんは、フンっとはなを鳴らすと腕組みをした。

「頭はおかしくないわ。お金の心配なんて10年早い」  
「でも……」

母さんは、俺の頭に手を乗せて、クシャツと撫でた。

「勇が10年思い続けたご褒美かな。想いが伝わって良かったじゃん。はりきって行ってらっしゃい」

そう言われると、なんだか嬉しくて目頭が熱くなった。

俺の10年間の初恋は、つい最近花開いたばかりだ。

母さんは、ずーっと知ってんだよね……。

「ありがとう、母さん……」

「いいえ、どういたしまして」

そう言つと、母さんはドアに向かって歩き出した。

「あっそうそう、母さんはまだ、お祖母ちゃんにはなりたくありませんから。鈴ちゃんに手を出さないように……！」

とんでもないことが聞こえてきた直ぐ後に、ドアが閉まった。

ドアの向こうで、まだ何か言ってる。

「手を出したら、直ぐにバレルんだからね！ 子供は清い交際よ」  
「バーン……！」

俺は、持っていたブーツをドアに投げつけた。

「クソババア」

母さんは、いつも一言多い。

せつかく、母さんの気遣いに感動してたのに、手を出さないようにだつて、どう言う事だよ。

えっ？ それつて、お祖母ちゃんつて事は、キスのことじゃないよな……

もしかして、キスしたことも知ってるのか？

そりゃアないよ鈴ちゃん……秘密にしといて、お願い！

ああ、キスカア

県大会の後、好きだつて告りあいつこみたいになつた時にしたつきりだよな……

キス……してエ

……

俺は、想像力がありすぎるのか、してはいけない想像で頭が満杯状態になってくる。

ブンブンと頭を振つて、自分の妄想を払いのけた。

「よしっ着替えてみよう」

母さんの買ってきた服を着てみることにした。

こんな服、着るのは久しぶりつてか、ほとんどマトモな服は着た事がないから、オタオタしてしまう。

最後にジーパンを穿いたけど、ちよつと大きいのか腰まで下がる。ふつと下を見るとベルトが落ちていた。

「あつた、これで大丈夫か」

俺は、ベルトを通してギュツと締めた。

これでズレなくなった。

外は暗くなつているので、カーテンを開けて窓に映る自分の姿を見た。

「何か変？……」

その時、コンコンツとノックの音がした。

「ノックしたわよ。これでいっ……キヤハハハハハ……」

ドアを開けて俺を見た瞬間に、母さんはその場に崩れ落ちるよう  
にして、笑い転げた。

「ゆっゆっゆっ……まつがっちゅる」

「何だつて？」

母さんは、まだ笑っている。

「勇、間違ってるわよ」

「何が!!」

「ふっふくの着方がよ」

「……????????……」

俺は、Tシャツもチエックのシャツもジーパンの中に入れ、ベル  
トをギュッとウエストで締めていた。

「何が、間違ってるんだよ……」

「1」 服の着方が……（後書き）

空手一筋の兄貴と弟、そんな中に過ごしては、ファッション雑誌など見ないでしょうね……

その後の勇と鈴を書いてみたくなりました。  
宜しく願います。

「2」 おとまりの朝？（前書き）

デートに出かける勇の髪を、母がアッチへコッチへ引っ張りまわしてます。

いつのまにか

## 「2」 おとまりの朝？

「はア〜」

俺は、大きな溜め息を何度も吐き続けている。

「はア〜」

「はい！ できた。勇つやっぱり男前ね、大好き」

さっきから、俺の髪の毛をあっちに向けたり、こっちに向けたりと悪戦苦闘していた母さんが、ニッコリ笑顔で抱きついてきた。

「……はア〜」

俺から離れた母さんは、後ろから俺の肩を小突いてきた。

「溜め息ばかりついてないの！ これから鈴ちゃんとデートですよ」

「誰のせいなんだよ。起きたら直ぐに着替えるっ、ここに座れっ、1時間だぞ」

母さんは、まるで何でもない事のように、フンツと鼻を鳴らすと俺の後頭部を指で弾いた。

「生意気。服の着方も知らないで、母さんが教えてあげたのよ。髪の毛ぐらい好きにさせてもらわないとね」

「何で、髪の毛ぐらいって、意味わかんねーし」

そう言った俺の首をギョツと絞めると、母さんは唸った。

「あんたはねっ、生まれるまで女の子ですよって医者がいつてたのよ。それが何？ 生まれてみれば男の子。母さんの身にもなっつてよね！」

えっ？ それって……

「女の子が生まれたら、あれもしよう、こつもしようって夢見てたのよ。弘弥の時に出来なかつた事をゼーンブ」

ゼーンブってなんですか？

「今、あんた全部って何だ？ とか思ってるでしょう」

俺は、コクコクと頷いた。

「決まってるでしょう。髪の毛伸ばして三つ編みに、お団子、パ  
ママもいなアとか、フリフリのワンピースなんて素敵じゃない」  
「そうかなア……………」

ボカツ!!

母さんは、俺の頭を今まで使っていたドライヤーで殴った。

「息子しかいない母親の夢なのよ。あんたになんか分かるわけな  
いの!」

そう言うと、案外どんなことしても崩れないものね、なんて呟い  
て洗面所から出て行った。

俺は、何度も小突かれたり、殴られたりした頭を擦りながら、本  
当に崩れていないヘアースタイルに見入っていた。

サラサラの髪は、ワックスなるものを付けられてちょっとゴワつ  
いているし、長めの裾は外に向かって跳ねさせてある、頭頂部もフ  
ワフワといくつにも分割された毛の束がアツチコツチに向いている。  
母さんの1時間の苦労は、多分報われているのだろう。

だって、皆がおしゃれだとか言ってる同級生の髪形にそっくりだ。

「さア、朝飯でも食うかなア」と

俺は、そのままキッチンに入って母さんに声を掛けた。

「母さん、朝飯はアーモンドトーストがいいんだけど、ある?」

母さんが、俺をじっと見つめている。

「どしたの?」

母さんは、テーブルについて朝飯を食ってる兄さんを指さした。

「弘弥がね……………ご飯も、パンも全部食べちゃったみたい」

兄貴っそれはないでしょう。

なんば大食いでも、弟の分は残せよ……………でも、食ってるときには  
何も言わない方がいい。

食べ物を取られそうになると、凶暴になるから。

パジャマ代わりのジャージのまま、もくもくと食事をしている兄  
貴は、結構子供っぽいア……………なんて言ってる場合じゃない。

けど……………

「兄貴、すごい食欲だね」

「おおっ勇、おはよう。なんだ？ その頭？ 変だぞ」

「変って母さんがしてくれたんだぞ。カッコいいって言った方がいいと思うけど」

俺の忠告は遅かったらしい。

ゴンッ

「弘弥！ あんたね、自分がデートできないからってひがんでんじやナイわよ。勇のヘアースタイルはバツチリよ」

兄貴は、ゲンコツで殴られた頭を摩ってる、空手のツワモノも母さんには敵わないよなア……

「あつ、弘弥あんたにも服買って部屋に置いてあるから、後で着てみなさい。どうせ着方も分からないでしょう。直してあげるわ」  
「服の着方ぐらい知ってるよ」

母さんは、チチチツと舌を鳴らしながら人差し指を口元で振りながらダイニングを出て行った。

兄貴が俺を見ている、何が言いたい。

「母さんの言うとおりだと思っな。兄貴は俺より酷いんじゃないか？」

「俺に、お前より酷いところなんてないっ」

いいえ、ありますからっ、自覚がないって怖いよな。

俺は、それ以上何も言わず、家を出ることにした。

「じゃア、俺行ってくるわ」

兄貴が、慌てたように立ち上がった。

「勇、こっこんなに早くからデートか？ 早すぎるんじゃないか？  
まだ8時だぞ」

何言っただよ、待ち合わせは9時だけど、俺は朝飯を食うのに早く出るんではないか！

誰のせいだっ。

「いや、朝飯まだ食ってないから、外で食べるわ」

「何処でだ。ど・こ・で食べる」

何を言ってるの？ 兄貴には関係ないだろう、そんなに食っててまだ聞くか。

「え〜わかんねー、けど……駅前の牛で朝定でも食うかな？ それか……サテンでモーニング？」

兄貴は、口をパクパクさせてもがいている。

「朝定食はやめろ、モーニングならまだ食える」

「はア？」

「ちよつちよつと待ってるいいな」

兄貴は、バタバタとダイニングを出て階段を駆け上がっていく。

母さーんと呼ぶ、兄貴の声が聞こえた。

兄貴が、ジャージが制服か空手着の他の服をどう着たのか、とても気になるところだ。

けど、今のうちに家を出ておこつ。

デートの邪魔はさせないからな。

兄貴は絶対に付いて来る気だ……そんな気がする……

いつのまにか

俺は、一人で朝定を食ってる。

でも、牛じゃないんだな、これが。

駅から少し離れたファミレスにいるんだ。

「ふう〜」

腹いっぱいになって、溜め息をついた。

食後のコーヒーでも飲みますか、勿論、飲み放題だし。

鈴ちゃんとの待ち合わせには、まだ時間があるし、ゆっくりしよう。

俺って、結構策略家？

最初から、このファミレスに決めてただけで、兄貴には言わなかった。

どうして、俺と鈴ちゃんのデートに着いてこようと思ったのかわらないけど、迷惑だったの。

「犬に食われてる」

ドリンクバーでコーヒーが入るのを待ってる間に、つい呟いてた。

「誰が、犬に食われるって？」

俺は、後ろから聞こえた声に、思わず振り返った。

「あつ、あんた、えつと……」

「ひつどーいジユリだよ。忘れたなんて言わせないんだからア」

言わせないんだからアって、何で？

「いや、あつ、忘れてません」

「忘れてねーんだ。ジユリの事」

この声！ まさか……

「立川つ。何してんの、こんなトコで」

やっぱり立川だ。

それも、元カノちゃんと一緒ですか。

立川が、笑ってる。

「こんなトコって、お前の方が可笑しいだろうよ。こんな早くから」

一人でこんなトコさ」

確かに、返す言葉もない。

まさか、兄貴が朝飯を全部食ったなんていえなーしな……

「まア、これから出かけるのかなもんで。お前らは？」

俺のその言葉に、ジユリちゃんが反応した。

「あたし達はア、お・と・ま・りの朝ってトコでしょう、うぶっ」

お・と・ま・り？ の・あ・さ？ って何語ですか？  
俺の顔は、一気に真っ赤になってるに違いない。  
体中が熱い。

立川が、面白そうに笑った。

「松田、お前って、もしかして。ぶぶぶっ  
何だよ。」

うるさい！

くっそっ、でも言い返せない。

まだ笑ってる立川の腕に、自分の腕をからめたジュリちゃんが、  
嬉しそうに言った。

「あたし達さ、より戻ったの。最近は、すっごく大事にされてんだ  
から」

「そう、よかったな……」

俺の頭の中は、何が何なのかパニック状態だったけど、なんとか  
それだけは言えた。

「まア、松田お前も頑張れよ。伊原鈴とな」

固まったままの俺を残して、二人は店を出て行った。

「ちよつと、そこ、コーヒー入れたいんだけど」

俺の後ろで、おっさんがカップを持って待ってた。

「すっすんません」

俺のコーヒーは、完璧に冷めてるはずだ。

いつのまにか

「2」 おとまりの朝？（後書き）

デートの前に聞いた、立川とジュリのシヨッキングな一言。  
未経験の勇には、刺激がきつすぎたかも？

いつのまにか

「3」 握った手（前書き）

鈴ちゃんとのデート開始！  
幼なじみが恋人になって、感激と戸惑いと？

いつのまにか

### 「3」 握った手

駅に着いた。

俺は、たった一人ぽつんと立っている。

いつもは、学校に行く時間だから駅は、学生やら出勤する大人達でいっぱいなんだけどな……

まア、日曜日の朝9時は、人通りも少なくて当たり前か。

今日のこの日の為に、俺はデート情報を友達の冬馬から仕入れていた。

冬馬は、俺と同じ様な童顔タイプだけど、それを利用して結構もてる。

彼女がいないことのほうが少ないんじゃないかな？

はいはい、俺は鈴ちゃん一人ですよ。

それがどうした、男の鏡と言って欲しい。

「勇ちゃん、お待たせ！」

俺の肩をポンッと叩いた声の主は、勿論、鈴ちゃんだ。

「おはよ・う……」

俺は、固まった。

鈴ちゃん……可愛すぎです。

真っ白のハーフコートにはフードのところにフワフワのファーが付いてて、その中には薄いブルーのセーターを着てる。

ダークグレーのミニスカートからスラリと伸びた足は、長いソックスの上に黒いブーツを履いていた。

何もまとっていない、太ももの半分から膝小僧が、スツゴク寒そうなのに、俺は可愛そうにと思う以上に、他の意味でその場所が気になっている。

何だか、俺は変態オヤジのようだ。

鈴ちゃんが、首を傾げている。

「勇ちゃん？ どうしたの、この格好、変かな？」

俺は慌てて首を振った。

「いいいや、そうじゃない。いい、いいよ」  
「いいの？」

俺を見つめる鈴ちゃん目が、心なしかキツクなった気がする…  
…何か、おかしかったかな？

足バツカ見てたのばれたとか？

「いいって何？ 何がいいの？」

あつもつとキツクなった、やばい、ここは褒めるところか？

「えっと、カワイイの、イイ、です」

鈴ちゃんの顔に、大きな笑顔が広がった。

「カワイイの、イイ、か。よかったア」

鈴ちゃんは、嬉しそうに笑いながら、俺の手を握った。

「勇ちゃん、今日は何処に行くの？」

手を……握った。

手を……

「勇ちゃんの手、温かいね」

鈴ちゃんの手は、冷たい。

でも、ずっとポケットに入れてた俺の手は温かい。

「勇ちゃんの手、おっきいね」

鈴ちゃんの手は、細い。

俺の手は、大きくてゴツゴツしてる。

鈴ちゃんの手は、気持ちいい。

俺の手は……

「勇ちゃんの手、気持ちいいね」

俺の顔は、今、絶好調に真っ赤だと思う。

その時、俺と鈴ちゃんの横を、親子連れが通りかかった。

「ママア、お兄ちゃんのお顔、真っ赤だよ。お熱あるよ。病院いかなきゃね」

小さな女の子が、俺を指さして大きな声で言った。

お母さんらしい女の人が、ぺこっとおじぎをして、すまなそうな、

可笑しそうな複雑な表情で通り過ぎた。

「プツ」

鈴ちゃんが噴出した。

「何が可笑しいんだよ、鈴ちゃん」

「可笑しくないよ、勇ちゃん。でも、真っ赤な顔が、可愛いなって思ってた……」

クソツ、可愛いつて言うな！ 可愛いつてつ。

その言葉は、俺の為にある言葉じゃないんだ。

「行くぞー!!」

俺は、鈴ちゃんの手をギュツと握ったまま、駅の改札へと歩き出した。

「ねエ、勇ちゃん。どこ連れて行ってくれるの？ リクエストは〇

K？」

「だめ！ リクエストは受け付けません」

俺には、俺の計画がある、決して、いかがわしいものではないぞ。鈴ちゃんが立ち止まった。

「どうして？ いつつも、私の言う事聞いてくれるのに……」

鈴ちゃんを振り返ると、大きな瞳が、不満そうに揺れている。

「……んん〜エツと、くつそ、あア〜今日は特別、鈴ちゃんと俺の初デートだから、俺が決める。着いてきて」

鈴ちゃんの瞳が、見る見る大きく開いた。

今にも零れそうなほど大きく開いた瞳は、直ぐに笑顔になった。

「勇ちゃん、大好き!!」

鈴ちゃんは、その勢いのまま俺の腕にしがみ付いてきた。

大きな鈴ちゃんの声に、さっきまであまりいなかったはずなのに、いつの間にか増えていた人通りが、一瞬止まった様な気がした。

「れっ鈴ちゃん、いつ行こうか……」

「うんっ」

もう一度、真っ赤な顔になった俺を、嬉しそうに見ながら、絡んだ腕はそのままにして、鈴ちゃんは歩き出した。

勿論、腕を組まれた俺も一緒に……  
今日、俺は何回ぐらい真っ赤になればいいんだろう……

電車は、ガタガタ揺れて走っている。

鈴ちゃんと二人で並んで席に座った。

握った手は、そのままだ。

鈴ちゃんの冷たかった手も、今は暖かくなっている。

鈴ちゃんも俺も、さっきからあまり話をしていない。

何でって？ 俺は握っている手が気になって、俺の足の横にあつて温もりが伝わってくる鈴ちゃんの太ももが気になって、話しができない……

鈴ちゃんは、どうしていつもみたいに話さないのかは、俺にも分からない。

けど、さっきから握ってる手を見つめているようだ。

お願いだ、鈴ちゃん、いつもみたいに話しかけてくれ、そうでないと俺にはとてもキツイ状態になってしまう。

何がってのは聞かないでくれ。

「勇ちゃん、こうして手を握るのって、幼稚園の頃から考えても初めてよね」

「あつ？ うん、そうだけど」

鈴ちゃんが、ギョって握った手に力を入れてきた。

「勇ちゃん、私がこの手をいつからギョってして欲しかったか知ってる？」

はア？ そんなの知るはずないでしょう、何を言ってるんですか、あんたって人はっ！

俺の片思いは10年続いたんだ。

鈴ちゃんが、そんな事を思ってたなんて……

……思ってたんだ……

「そんな事、思ってたの？」

「うん、中学に入って直ぐの頃かなア……」

「中学？」

「うん、中学に入って直ぐの大会で、勇ちゃんが1年生でベスト8になったでしょう。その時、握手してって別の道場の中2の女の子が来たの覚えてる？」

覚えてません。

確かに、握手してって言われる事は、何回かあったけど、それがいつのどの子かなんて分からないし、興味もなかった。

「覚えてない……ごめん」

「そっかア、私ねその時、スツゴク嫌だったの。勇ちゃんは私のっだっと思ってた。その子の手を握らないで欲しいって。でも、勇ちゃん握った！」

鈴ちゃんが、顔を下に向けた。

何だか泣いているような気がするけど、気のせいかな……

「鈴ちゃん？……」

「握ったんだよ、その子の手」

「そこですか？ そんな事を今言われてもなア……」

「いやっ、それはっ相手がさっ」

鈴ちゃんが、思いつき握っていた手を振り払ってそっぽを向いた。

何で？ そうなるかなア……

でも、怒れない俺って、どうよ……

我儘には、慣らされてるから、そんなに腹は立たない。

けど、せつかくの初デートに、訳のわからない事でふくれられる

のも、どうかな？ ツて感じだよなア

「何で、そんなに怒るわけ？」

鈴ちゃんが、こつちを見て睨んだ。

大きな瞳は、ジツと俺の目を覗き込んでいるので、その中にいる俺自身が映って見えた。

「握ったからっ。勇ちゃんが握ったから」

俺が握ったって、それは……

「……れい……」

「勇ちゃんから握って欲しい。いつつ私の手は、勇ちゃんから握って欲しいの。もう他の誰の手も握らない約束……ほしい、から……」

鈴ちゃんの告白に、俺の胸の奥がキューって音を立ててる。

そんな可愛い事を思ってたなら、その時に言ってくれ。

そんな女の手なんか握らないし、いつだって鈴ちゃんの手を握るのに。

俺は、鈴ちゃんの手を掴んで、ギュって力を入れた。

「勇ちゃんっ、痛いよ」

「あっごつごめん」

鈴ちゃんは、笑顔になって俺にもたれかかってきた。

「いいよ、幸せな痛いだから」

「……」

俺も幸せです。

「ところで、勇ちゃん？ 聞きたい事あるんだけど、答えてくれるよな」

「何？」

「なぜか、嫌な予感がする。」

この聞き方は、長い付き合いの中で、一番痛い事を聞いてくる時の聞き方だっけと事くらい分かってる。

「勇ちゃんの部屋の、ベッドの下にある雑誌は、まだあるの？」

「ええっ！……！！……！！」

何ですとオ〜!!!

何で鈴ちゃんが知ってるのっ

母さん……あんだだね……俺の恋路を応援してんのか、邪魔して  
んのか

どっちなんだよ!!

その時、俺達の後ろの席から、クスクスと笑う声が聞こえてきた。  
どこかで聞いたクスクス笑いだ……まさかな……

いつのまにか

「3」 握った手（後書き）

勇の母は、かなりの曲者。  
後ろの席には、いったい誰？

いつのまにか

「4」 映画とランチ（前書き）

勇と鈴の後ろにいたのは？

なぜか、二人だけになかなかかなれない勇と鈴。

いらぬお世話が多いようで……

いつのまにか

## 「4」 映画とランチ

「何でいるんだよっ」

「何でわかんだよ!」

そう言っつて、俺の頭越しに声を掛けて来たのは、親友の冬馬だ。

冬馬は、ニヤニヤと笑いながら、通路を挟んで俺の隣に座った。

「勇っつて、今でもスケベ本ベットの下に隠しテンのかよ。それじゃ

あ、オバサンに見つかるっつて」

俺は、冬馬の顔をまじまじと見た。

鈴ちゃんが俺の大事な工口本の隠し場所を知ってる訳を、何でお前に分かるんだよ。

俺の視線から、意図を察したように、冬馬が答えた。

「勇んちのおばさん、おしゃべりだしさ。面白いつてかさ、なんでも有りっつて感じだろ。彼女のお母さんにでも、話しちやいそうじゃん」

当たり前だ! それ以外考えられないのは確かだ。

「鈴ちゃん、あのさ、その雑誌はア、こいつの言う様なスケベな本じゃないから」

いいえ、巨乳グラビア雑誌です。

鈴ちゃんは、何も言わないまま俺を見つめてる。

何か言いたい様な気がするんだけどなア……その目……

「母さんがおばさんに何て言っつたか知らないけど、違っつから……」

俺は、冬馬の方を向いて怒りをあらわに睨みつけて、拳を握っつて見せた。

「勇ちゃん? あの胸の大きな女の人載っつてる雑誌、中は見てな

いけど、エッチな本以外考えられないけど」

「……え?……」

あの胸の大きなっつて……

鈴ちゃん? いつ俺の部屋に入ったのかな? ひどすぎるじゃな

いか鈴ちゃん！

「いつ俺の部屋に入ったんだよ……」

「ん〜半年ぐらい前？ かな。お母さんと一緒に遊びに行ったのに、勇ちゃんたら友達と出かけたって言うから、つまらなくて探検したの」

「半年も前つそれも、探検じゃないだろう。それってさっ」

「ギャハハハハハ！ お前ら、おっかしい。幼なじみって、こう言う時キツイよなア」

お前、月曜になって後悔するなよ、冬馬！！

冬馬は、笑いながら立ち上がった。

「じゃアっ俺もうそろそろ降りるわ。デートの待ち合わせが次の駅なんだ」

冬馬はすつと俺の耳元に顔を寄せると、素早く言った。

「お前らの席から6列後ろに、弘弥さんが座ってる。見張られてんじゃネーカ」

鈴ちゃんにも、それは聞こえたらしい、振り向こうとしている。

「れいちゃん、見たらダメだ。相手が見つかってないと思ってるうちに、まいちゃえ」

「……」

「幼なじみつて壁を一つ越えると、一線越えんのも早そうだから、親も兄貴も心配なんだろうな、可愛そうに。一線越えたかったら、弘弥さんはまいちゃわないとナ」

冬馬は、がんばれ〜なんて言いながら降りて行った。

「一線を越える……」

鈴ちゃんが、小さな声で呟いた。

鈴ちゃんの小さな声が、俺の頭の中にこだましてる。

『一線を越えたかったら、弘弥さんをまいちやわらないとな』冬馬の言葉がよみがえる。

兄貴が、俺達の初デートを尾行してるってのも気に入らないけど、母さんの差し金か？ それとも、兄貴の意思？

二人とも、過保護が過ぎるんじゃないのか？

鈴ちゃんに対してか？ 俺に対してかは、分からないけど……そこが微妙だ。

でも、邪魔されたくなくって、兄貴をまいたら、鈴ちゃんはどう思うだろう。

俺が、一線を越えるつもりで兄貴をまいたって思わないか？

そりゃア、俺も健全な男の子だから、その気が無いと言えば嘘だけど……いや、その気は十分にあるさ。

でも、今日じゃない。

断じて、今日じゃないんだ。

上手くいって、二度目のキスができたらって思ってるから、兄貴の存在は十分に邪魔なだけなんだ。

兄弟に、自分のキスシーンを見て欲しい奴なんていないんじゃないか？

そうだ、ここは絶対に兄貴をまいてしまわなくては！！

俺は、鈴ちゃんには何も説明せずに、席を立った。

鈴ちゃんは、俺の手を握りしめて何もいわずに付いて来た。

俺は、神経を後ろに集中させて、兄貴が立ち上がったかどうかを探ろうとしている。

でも、探偵や警察か、超能力者じゃない俺に、それが分かるはずも無いんだけどね。

「鈴ちゃん、このまま3つ駅を通り越してから、次の駅で一気に降りるから、その後、走るけどいい？」

鈴ちゃんは、黙って頷いた。

「いくぞ！」

4つ目の駅について直ぐ、俺達は電車から飛び降りた。

走って改札を抜けて、そのまま走り続ける。

チラツと後ろを振り向いたら、ごった返してる改札の出口であたふたしてる兄貴の姿が見えた。

黒いハンチング帽を目深にかぶって、変装のつもりなのか、母さんのファッションセンスなのかは知らないが、黒のダウンジャケットの中に濃い紫のニットを着てて、なかなか似合ってる。

ってそんな事に感心してる場合じゃない。

このまま、まいちゃえ！

「鈴、いくぞ！」

「つつん」

鈴ちゃんの返事が弾んでいる気がする……。

俺って、いいほうに考えてネーカ？

一線って、何処までで何処からなんだ？

冬馬、そこまで教えてから消えてくれっ

ここまでくれば、兄貴にも俺達の居場所は分からないだろう。

だって、ここは映画館の中だ。

暗くて周りなんて見えない。

え？ デートと言えば映画って兄貴が気付くって？

そこは考えたさ、この辺は映画館が3軒あるんだ。

その中でも、上映本数が多くて、人の出入りの多いところを選んだ。

人を隠すなら、人の中って、何かの本？ 漫画？ に書いてあった。

目の前のスクリーンでは、アクションものの映画の中の主人公がラブシーンの真っ最中だ。

死にそうになってるのに、何度もキスして抱きしめあって、そんな場合じゃないだろうっ。

つつこみを入れたイトコだけど、隣の鈴ちゃんは必死にスクリーンに見入っている。

俺は、そんな鈴ちゃんに見入ってるって感じなんだよな、これが映画のストーリーは、ほとんど分からないまま、そろそろラスト

に近くなってる気がする。

まア、最後まででも真面目に見ますか。

スクリーンの中のラブシーン中だった男女は、身体を離してそれぞれに危険な箇所を潜り抜けていく途中のようだ。

この女優、けっこう胸大きいよなって、外人だから当たり前？  
ぴったりした服が胸の大きさを強調している。

俺って、けっこうボイン好きみたいだよな……勿論、お尻も、太ももも、何処もかしこも好きですけどね、特に胸は大きいほうがいかもしれない。

鈴ちゃんって、痩せてる方だけど……胸？ 大きい？ とは思えないよな、どっちかと言えば小さい方かもしれない。

でも、そんな事は鈴ちゃんにとって、何の問題でない。

俺は、鈴ちゃんが好きだから、鈴ちゃんのおっぱいが好きなわけじゃない。

そら、大きいに越した事はないけど、無理を言っても仕方ない、こればかりはさ。

って、やっぱり映画に集中はできないよな。

考えてるだけで、さっきから、横にある鈴ちゃんの胸が気になり始めた。

俺って、ホント……おバカなのかなア……

いつのまにか

「4」 映画とランチ（後書き）

勇は、巨乳好き？

鈴の胸は？

映画館に行ったなら、映画はしっかり見ましょつね。

いつのまにか

「5」 殴られた？（前書き）

映画館を出て、ランチを食べてるのはいいけど、鈴の新たな質問に、勇はおたおた。

でも、きっと鈴には鈴で聞きたいこと山のようにあるんでしょうけど……

「5」 殴られた？

「勇ちゃん、映画見てなかったでしょ。それとも見てた？ 女優さんの胸ばっかり」

いいえ、見てたのは、セーターのうえからしか見えない、鈴ちゃんの胸です。

「ごめんなさい……」

「ちゃんと見てたって、ちゃん」と

「うっそよ。さっきから映画の話してるのに、答えられないじゃない」「い」

「……」

俺と鈴ちゃんは、映画館を出てパスタの美味しそうな店に入って、昼飯を食ってる最中だ。

鈴ちゃんは、きのこのスープパスタ、俺はペスカトーレとやってやっ。

鈴ちゃんは、相変わらずよく食べる。

俺のパスタも味見して、美味しいねって笑ってた。

でも、俺にはくれる気配はない。

なぜか、こんなところは兄貴に似てる。

同じ、B型だからか？ 俺はAB型だ。

けっこうキツイカッブルかもナ。

「ねエ勇ちゃん、勇ちゃんは……胸の大きい女の人が好きなの？」

突然、何ですかっ

ここは、食事をするところで、そんな事を聞く場所じゃないですよっが！！

結構大きな声だったから、隣の席にいた女の子の三人組がこっちを見て笑ってる。

俺は、恥ずかしさをごまかすように、少しキツイ口調で答えた。

「何のこと。鈴ちゃん、今は取り合えずメシ食っちゃおうぜ」

「答えられないの?」

俺の口調に、少し眉を寄せた鈴ちゃんも、かなり言葉尻がきつくなつた。

これ以上機嫌が悪くなるのはまずいよな……少し優しく言ってみよう。

「いやっ、そうじゃないよ、その話題は、ここには似合わないかなつてさ……」

「そっかア……じゃア後でいい」

俺は、昔から鈴ちゃんの我儘には弱い。

どんなに、振り回されても怒らずに来たんだ。

でも、「胸が大きい女が好きか」なんて、こんなトコで聞くのは、鈴ちゃんの方が悪いと思うんだけど……

やっぱ、付き合い始めても、俺は鈴ちゃんの言いなりなのかな?

絶対、俺のほつが鈴ちゃんをイッパイ好きなんだろうから、仕方ないかもしれない、惚れた弱み? つてどこ?

それにしても、ああ、後で聞かれるんだ。

どう答える? 大きい胸が好きですつて答えるのか?

それはマズイでしょうな……

今のうちに、答えを探しておこう。

いつのまにか

俺の心配をよそに、鈴ちゃんから胸に関する質問は今のところやれていない。

俺達は、港の見えるショッピングモールを歩いていた。

屋根はなくて、空が見渡せる、開放的なところだ。少し寒いけど、二人でいるとそんな事は気にならなかった。鈴ちゃんは、可愛いグッズを見つけると駆け寄って手に取り、俺に見せてくれる。

冬の青空が、鈴ちゃんの大きな瞳をキラキラと輝かせている。

いつもより、鈴ちゃんが可愛く見える。

なんだか分からないけど、自分の彼女になったって感じがしてくるのが不思議だ。

やっぱり、デートってすごいんだ。

毎日、朝の通学と、道場で会ってるのに、その時とは全く違う雰囲気だ。二人を包んでいる。

幸せだよなア……

「勇ちゃん、ちょっと休憩しない？」

「えっ？ 休憩？ あっそうか、そうだな、なんか飲む？」

俺は、周りを見回して、直ぐに見つけたオープンカフェを指差した。

「ウン！」

俺達が行ったところはセルフコーナーだったみたいで、鈴ちゃんを座らせてから、俺がドリンクを買いに行った。

結構混んでいて、鈴ちゃんのホットココアと俺のホットカフェオレを買うだけに5分以上掛かったと思う。

俺が、鈴ちゃんの座つてるところへ戻ろうとした時、思いも寄らない光景が目飛び込んできた。

鈴ちゃんが、二人の男に両腕を掴まれて、立たされようとしている。

鈴ちゃんは嫌がって、何か叫んでるみたいだ。

「鈴ちゃん！！」

俺は、慌てて持っていたドリンクを放って駆け出した。

何で周りの人間は止めてくれないんだよ、クソッ！！

「何やってんだよ！」

俺は、一人の男の腕を掴むと、鈴ちゃんから引き剥がそうとした。男が振り帰って、俺を睨みつける。

「何だア、ホントに男連れかよ。でも、見た目は女みてーじゃネーカ」

もう一人が笑った。

「女なんじゃネーの？俺はこっちの子にすつから、お前そつちにしな」

「嫌だね！俺もそつちがいい、なアカワイコちゃん？俺達と遊びに行こうぜ」

「行こう行こう」

二人は、俺を無視するように、鈴ちゃんの腕を引つ張った。

この野郎っ俺の鈴から手を離せ！

これでも喰らえ！！

「！！ガッ……」

俺は、男の腕を掴んだまま、その顔面に裏回し蹴りを入れた。

鈴ちゃんを掴んでいた手を離れた男は、うとうつと呻きながらうずくまった。

ポタポタと鼻血らしきものが、落ちていく。

靴のままだし、防具もつけていない相手だから、かなり加減はしたつもりだけど、強烈に痛いはずだ。

俺は、いつの間にか一人呆然と立っている鈴ちゃんを自分の方に引き寄せた。

ガッン！！

「勇ちゃん！！」

鈴ちゃんが俺の名前を叫んだ……  
バタバタと走ってくる音が聞こえる……

「勇ちゃん……勇ちゃん！！」

「お前ら！何をやってる！！こらっ逃げられんぞ」  
誰だか分かんないけど、おっさんの声が聞こえる……

鈴ちゃん、鈴ちゃんを守らないと……

いつのまにか

あいつらが、鈴ちゃんを連れて行ったまじっ……

「れ……い、ちゃ……ん」

俺……殴られた？……

鈴ちゃんは？

「勇ちゃん、ゆうちゃん、ゆう……」

ああ、いるんだ鈴ちゃんは俺の横に……よかった……

いつのまにか

いつのまにか

「5」 殴られた？（後書き）

勇はどうなってしまっただろうか？  
大したことがないといいけど？

「6」 病室にて（前書き）

怪我を負った勇は、病院にいます。横には勿論、鈴が付き添っています。……

いつのまにか

「6」 病室にて

白い、壁？

ん？ 何処？

学校行かなきゃって……何曜日？

薄目を開いた俺の前には、白い壁が見えている……

俺って、横むいて寝ない人なのに、珍しい事もあるんだなア……

「勇ちゃん？」

「れ、い、ちや、ん？」

なんで鈴ちゃんがいるんだ？

だんだん意識がハッキリしてきた。

確か、鈴ちゃんとデートしてた筈だ。

鈴ちゃんはココアで、俺は……

いやっそんな事じゃないっ

あいつ等、何処行った！

「クソっ！！！！いつてエ」

起き上がろうとしただけなのに、何でこんなに頭が痛エ〜んだよ

……

俺は、頭を抱えてベットにうずくまった。

「勇ちゃんっ動いたらダメだよ。頭の後ろ側が切れてるし、打撲もひどいんだよ」

「何で切れてるの……」

「あいつらの一人に、腕につけてた皮ベルトみたいなので殴られたの。ベルトに金具って言うか、飾りがついてたみたいで……それで」

鈴ちゃんが、泣き始めた。

ダメだって、泣くのは反則。

今は、上手く慰めてやれない、だって、痛いんだ……

どこがって、頭……実は心も痛い……

鈴ちゃんをちゃんと守れなかった事が、悔しい……

俺は、鈴ちゃんの頬に手を添えた。

「泣くな……鈴ちゃんが泣いたら、俺……」

泣かれたら、今は俺が泣きたくなる……

少しずつ思い出すこの痛みの原因。

俺は、鈴ちゃんを連れて行こうとしている二人組に、猛烈な怒りを感じたと同時に、やり込めてやる事しか考えなかった。

鈴ちゃんの安全を考える前に、戦う事しか頭に無かった。

そんなバカの為に泣かれたら、俺は……

ガチャッ！

「勇？ あっ目が覚めたか」

「兄貴……」

何だかホツとすると同時に、今は兄貴に会いたくないと思った。

兄貴は、直ぐに泣いている鈴ちゃんに気が付いた。

「鈴、こんな奴の為に泣く事は無い。心配してやるだけ勿体ないっ  
てもんだ」

「でも、勇ちゃんは私の為に怪我しっ」

「違う！ コイツが浅はかだから、こんな怪我をするんだ。お前の

せいじゃない。気にするな」

それでも、鈴ちゃんは首を振って俺の手を握り締めた。

兄貴の言うとおり、俺の浅はかな行動が、こんな結果を招いた。

へたをすれば、鈴ちゃんも怪我をするか、ひどい目にあっていた  
筈だ。

言われなくても分かっているよ兄貴。

だから、兄貴に会うのが嫌だったんだ。

自分でも分かっている、バカさ加減を上からなぞられるから……

兄貴は、俺をじっと見つめている。

「怪我の具合は、全治一ヶ月ぐらいだそうだ。MRIの結果も脳に  
は異常が無いだろうとの事だった。今、父さんと母さんが入院の手  
続きを終わらせてるところだ。あんまり親に心配を掛けるんじゃないぞ」

兄貴は、大きく溜め息をついた。

「勇、今回の事は師範の耳にも入れておく。謹慎は覚悟しておけ。シヨップینگモールの警備員が相手の男達を取り逃がしているが、周りにいた人は、お前が相手に何をしたのかは見ている」

「警備員……」

あの時の、おっさんの声は、警備員だったのか……

「シヨップینگモールの方も、警察沙汰にはしないと云っている。商売に差し障りでもあるんだろうが、警察沙汰になるうがなるまいが、空手道を志す者がやってはならん事は知っているな」

ああ、知ってるさ。

どんな時でも、空手の技を試合以外で、しかも一般人相手に使ってはいけない、だろ。

俺は、浅く溜め息をついた。

「ああ、分かってる。反省してる」

「なア勇、女一人守れなくてどうする。鈴と二人だけで出掛けなければ、全ての意味において鈴を守る男になれ。俺をまいたりなどしなければ良かったんだ」

その言葉に、俺は胸にチリリツと焼けるような痛みを感じた。

「俺があの場合にいれば、お前に怪我をさせるような真似はさせなかった」

まだ言うのか……

「馬に蹴られて死ね……」

小さく俺は呟いた。

「な・に？」

「馬に蹴られて死ねってのっ」

「勇っ何なんだ、その言い草は。こんな事を仕出かしておいて、自分の愚かさを反省も出来ないのか」

俺は、痛いのを我慢して起き上がった。

「それとこれは別だろう。どこの世界に弟の初めてのデートに付いて来る兄貴がいるってんだよ。俺のやった事は間違ってるかもしれない

ないけど、兄貴の考えもおかしいんだよ！」

兄貴のが拳をキツク握った。

指のふしが白くなっている。

「……バカやるう……ひとの気も知らないで……」

兄貴の気持ちって何なんだよつ、そんなもん知るかよ！

「ああ、ああ、俺は大バカだよ！ だから、兄貴の気持ちなんて分んねーし、鈴ちゃん一人守れなかった。そんなの俺が一番分かってるさ。謹慎でも何でも受けるさ。もういいっ出てけ、出て行けっ！……」

俺の手を握っていた鈴ちゃんの手が、ビクツと震えた。

「勇ちゃん、寝てなきや……ね？」

鈴ちゃん言葉の聞きながら、俺は俺の手を握ってる鈴ちゃんの手を外した。

鈴ちゃんが、離れた手をジツと見つめてる。

(私の手は、勇ちゃんから握って欲しい……)

一瞬、鈴ちゃんの言った言葉が頭をかすめた。

それでも、俺はそれを気付かないふりをした。

「鈴ちゃんも帰って、兄貴に送ってもらえば安全だから。さア行って……一人になりたい」

「ゆ……ちや」

俺は、意地を張ってる、分かってる、こんな間違ってる。

鈴ちゃんを泣かせたり、不安にさせたりしてまですることじゃない。い。

でも、後には引きたくない。

今、兄貴を受け入れられない。

兄貴はそんな俺を、何も言わずに睨んでいた。

泣きながら立ち上がった鈴ちゃんの背中に、兄貴がそつと手を添えて歩き始めた。

俺の目には、それはスローモーションの映像の様にゆっくり見えた。

兄貴が振り返る。

「勇、今のお前は最低だ」

そう、今の俺は最低だ……

スーッとドアが動いて、ガチャツと閉まった。

鈴ちゃんの涙が嫌なのに、自分で鈴ちゃんを泣かしてしまった。

兄貴の気持ちなんて分かってる……

俺と鈴ちゃんが心配だっただけなんだ。

俺と鈴ちゃんの想いが強かった分、二人の距離が急に縮まって、

母さんの心配が本当になる事を気に掛けてただけなんだ。

兄貴は、俺を思うのと同じ様に、鈴ちゃんの事も妹の様に心配してる。

それなのに、鈴ちゃんを慰める兄貴の姿が浮かんできて、俺はものすごい嫉妬が湧いてくる。

鈴ちゃん……戻ってきて……

鈴ちゃん……兄貴と帰ったりしないで……

鈴ちゃん、鈴ちゃん……

兄貴、ごめん……

いつのまにか

ガチャツ

「勇……あんたバカだね」

二人のいなくなった病室に、10分も経たない内に現れたのは、

勿論、母さん。

「かあさん……どうせバカだよ」

「そうね、そんなおバカさんに、お土産置いていってあげる」

「お土産？」

「一体それは、何ですか？」

「まア気晴らしになればいい、いいかア？」

「あ？ んん？ 土産って、まさか……」

「勇、大丈夫か？ 今夜は父さんがお泊りだ。楽しく過ごそうな」

「いや、ここは完全看護ではないのですか？」

「ここって、完全看護じゃないの？」

「完全看護さ、でも、先生に頼み込んで、お泊りになった」

「何で？」

「お前が自殺するといけないからって」

「親父が、母さんを指さした。」

「じゃって言うって、母さんは帰っていった。」

「自殺なんてしねーし」

「されたら困る」

「帰れよ」

「いやだね。父さんもお泊りするって決めたんだから」

「決めたのは、母さんだろ」

「そうだ、だから余計に帰れない。だろ？」

「親父の苦い笑顔に、プツと噴出した。」

「今は、このオヤジが俺の癒しになってくれそうだ……」

「勇、するめ食うか？ ビールもあるぞ」

「いや、親父、それはダメでしょう。」

「ここは病院。」

「俺は怪我人で、未成年ですから。」

「親父は、ニヤッと笑って、コーラを出した。」

いつのまにか

「6」 病室にて（後書き）

母のお土産が、父親と言うのは、何だか松田家はやっぱり変です。松田家父は、コーラが好物だったりして。

いつのまにか

「7」 親父の後悔（前書き）

勇と父親の、親子の会話。

そこには、どんな意味があるんでしょうか。

いつのまにか

## 「7」 親父の後悔

「ぶはア〜！ やっぱりコーラは旨いなア。そう思わんか勇？」

親父、思いつきりのゲップまでしなくても……

「ゲップは押さえるよな」

「冷たいこと言うなって、やっぱりコーラにはゲップはつきもんだ」

「なんだよそれっ」

親父は、俺をリラックスさせようと頑張ってたろう、わかってるよ。

親父が、俺にコーラを勧めながら、窓の外を見た。

もう日も暮れて、俺のベットからは街の灯りが窓に反射して見えた。

「勇は、鈴ちゃんが本当に好きなんだな」

「……」

「幼稚園からずっとだろ、父さんには信じられないくらい長い恋心だな」

親父は、外の夜景から目を離して、俺の事を優しい目でじっと見ている。

その目は、兄貴の目によく似ていた。

黒目がちの切れ長で、一見冷たそうなのに、よく見るととても暖かい穏やかさが感じられる。

「父さんなんか、小3の時に初めて好きになった女の子の事を、一ヶ月で嫌いになった。中学、高校も同じ様なもんだったな。好きになつては飽きてしまつたり、あんまり好きでもないのに興味本位で付き合つてみたり。だから、長続きなんてしたためしが無い」

ポリポリと頭を掻きながら、親父は笑った。

「母さんとは？ 長続きしたんだ……」

親父は、ニヤツつと笑うと、コーラを一口飲んでゲップした。

「母さんか？ 母さんとは社内恋愛だ。今の会社に同期で入社した

んだ。結構、最初から気があった」

親父は、また窓の方を見つめた。

「あの頃は、ほとんどの女子社員が一般事務を希望したもんだが、母さんは総合職を選んだ」

「総合職？」

なんじゃそりゃ？

「簡単に言えば、男も女も関係ない職場ってとこかな。その内、お前にも分かるだろうけど、女の人が、男と対等に仕事をこなすには、色々な面で苦勞が多いんだよ」

「ふーん、そんなもんなの」

親父は、コクリと頷いた。

「母さんは、俺なんかより成績のいいトップクラスの営業マン？」

「ウーマンか？ だったんだ……将来有望ってとこだ」

「そんな母さんを好きになったから、いまだに尻に敷かれてんのか？」

「いやっ尻には敷かれてない……はずだ。違うって、そうじゃなくてな……」

何だか、親父は少し話しづらそうだ。

恥ずかしいのか？ 自分達の恋話こいばなしが？

でも、自分から話し出した様な気がするけど？

「入社3年目には、母さんは大きな企画を任されることが決まったほど、優秀な社員だったんだよ。けど、その頃には俺と付き合ってた……妊娠した……」

「ホヘエ？」

俺は、初めて聞く両親の秘め事みたいなものに、思わず変な声をあげてしまった。

「オイオイツそんなに驚くことはないだろう。その子が弘弥なんだから、直ぐ後にお前も出来たしな」

ああそうだ、別に驚くことはないよな。

結婚してんだから……？？？？？

「でも、結婚は？　してたの」

親父が、苦笑いをしている。

「いや、だから困ったんだよ。母さんは、結婚か……いやっお腹に宿った命か、仕事か、どちらを取るかの選択を迫られた」

「誰に？」

「自分自身にだよ。母さんは、それまで仕事を何よりも優先してきたんだ。付き合ってた俺よりもな」

親父は、そう言うのと黙り込んでしまった。

何て言っていていいか分からないまま、黙っていると、親父が残りのコーラを一気に飲みほした。

「でも、母さんはお腹の命を取った。そして、俺の嫁さんになってくれたんだ。俺がどんなに嬉しかったか分かるか？　わからんだろう」

「あんま、分かんねーかな。だって、相手が母さんじゃな……」

「何言ってる。あの頃の母さんは、すっごく綺麗で、同期の奴の中には狙ってるのが多かったんだ」

あゝハイハイ、こんな所でのろけかよ。

「これは、のろけじゃないぞ」

のろけじゃなくて、何なんだよ。

「俺は、もの凄く母さんを好きだった。入社して直ぐに好きになって、やっとの事で振り向いてもらえた。付き合ってみて初めて知った事だったけど、それは母さんも同じだったんだ」

やっぱ、のろけじゃネーカ！！

自分の両親の恋愛など、あまり興味もない俺は、自分の手の中のコーラの瓶をクルクル回して、気を紛らせた。

「2年間も、想い続けてやっと手に入れた恋人だ。そりゃ夢中になったさ……彼女を離したくなかった、一時も……その結果が、妊娠だった」

何故か、親父の顔が苦しそうだ。

「母さんには、仕事に対する情熱も野心もあつた。それを、俺が奪

「ったんだ……浅はかな俺の考えが、行動が、母さんの将来を変えてしまった」

え？ それって、母さんが可愛そうって事か？

「兄貴と俺の母さんになったことが、母さんにとっては辛いことなんか？」

「そりゃないんじゃないか、親父っ」

「何か、むかつくぞ、親父。兄貴と俺が邪魔者みてーじゃん」

「親父は、大きく首を振った。」

「違う。母さんは幸せだっと思っててるよ。いつも幸せイッパイなのは間違いない。仕事よりも、キャリアよりも素晴らしいものと巡りあったって、お前達を抱きながら話してたよ、ずっと」

「それって、親父の前だからんじゃないか？」

「いや、女性にとつて我が子つてのは、何にも勝る宝石なんだっさ。私の子は、特別高価な宝石だっって喜んでた」

「宝石か……」

「それでも、俺は時々思うんだ、母さんには別の人生があったんじゃないかって。俺の後悔」

「自分を責めてるんだ、親父……」

「自分の浅はかな行動がっって言っってたもんな……」

「あ・さ・は・か・な行動？ さっき、兄貴に俺も言われた……」

「親父が、ふっと息を吐いた。」

「でもな、勇。そんな母さんだからこそ、お前達の事が気になるんだよ」

「俺達のこと……」

「そう、鈴ちゃんとの事。お前と鈴ちゃんの想いが強かった分、気持ち確かめ合った今、間違いがあっってはと気を揉んでる」

「俺は、ハツとして親父の顔を見つめた。」

「今の俺は、タコみたいに赤い顔になっってるに違いない。」

「俺達……そんな事には……」

「俺は口ごもった。」

だってそうだろ、俺は鈴ちゃんに対して、想像しちゃいけないよ  
うなことで頭の中がイッパイになる事が、最近よくあるんだから。

親父は、ベットに移動して俺の隣に腰掛けた。

俺の髪の毛を、兄貴がよくやるのと同じ様に、優しくクシヤツと  
掴んだ。

「勇、男なら好きな女に、今、お前が感じてる事と同じ事を感じる  
のは当たり前だ。お前がおかしいんじゃない」

俺は……

「でも……俺は……」

親父が、そつと触れないように注意しながら、俺の後頭部に手を  
回した。

「この怪我。これが今のお前の心の中を表してるんじゃないのか？」

「俺の心の中？」

「ああ、鈴ちゃんに言い寄った男達を見た時、お前はそこに自分の  
姿を重ねなかつたか」

俺は、親父を肩越しにマジマジと見つめた。

親父？ あんた……何？

あの時の、何処から沸いてくるのか分からない怒りと嫌悪感。

あれは、あいつ等に自分の姿がダブったから……

鈴ちゃんを穢している、自分の姿が重なったから。

だから、許せなかつた！

どんな事をして、ひねり潰してしまいたかつたんだ。

汚い自分を……なんで、親父に分かるんだろう。

同じ男だから？ か？

「勇、鈴ちゃんを本当の意味で、守れる男になるんだ。彼女を愛し  
ているならナ。俺と同じ後悔はするな。いいな」

「おやし……」

「鈴ちゃんの未来を守れなければ、一緒にはいられない。いつでも、  
リスクを背負うのは女の子だから」

親父は、兄貴と同じ目で優しく微笑んだ。

「さあ、もう一本コーラを買ってこよう。勇ももう一本どうだ？」

俺は小さく首を振った。

「俺はいいや……これ飲む……」

プシヤアア~~~~

「ウツワア~~~~!!!」

親父は、大好きなコーラまみれになった。

ありがとう親父、少しだけど皆の気持ちやが分かった気がするっ  
少しだけど、鈴ちゃんとうとう接していかないといけないか、分か  
った様な気がする……

いつのまにか

「7」 親父の後悔（後書き）

やっぱり、勇の父さんは、コーラが大好きみたいです。

「8」 ありえなー涙（前書き）

個室から4人部屋に移った勇。

同室の男は、なぜか看護師さんからんでいます。

その意味を、勇はなんとなく感じ取っているようですが？

いつのまにか

「8」 ありえなー涙

入院3日目の朝、俺は既に昨日4人部屋に移っている。

後頭部の傷の状態もさほど酷くなかったし、CTやMRIの結果も異常なしで、あと何日かしたら退院できるんじゃないかなって思う。

この部屋の住人は、俺と、61歳のじいさんと、75歳のじいさんと、27歳の高橋さんって言う男の人だ。

じいさん達の病状ははつきり分からないけど、61歳のじいさんなんか結構ゲンキ一杯に見えるんだけどな？

「はい、おはようございます。松田くん検温お願いしマース」  
看護師の桜川さんだ。

「おはようございます」

俺は体温計を脇にはさんだ。

「あれ？ 辻のおじいちゃんたら、また居ないの？ もうっ朝の散歩は検温が済んでからって言うてあるのに」

ゲンキじいさんは、既にお出かけの様だ。

「末吉のおじいちゃん、おはようございます。検温しますよオ」

看護師の桜井さんは、おじいちゃんの脇に体温計を差し込んだ。

「はい、高橋さん検温です」

最後に、高橋さんに体温計を渡す。

「ねエ、桜ちゃん。おれにだけ冷たくねーか？ もつと優しくして欲しいんですけどオ。俺のも桜ちゃんが脇に差してよ」

そう言いながら、高橋さんは桜川さんの方に手を伸ばした。

桜川さんだから、桜ちゃんらしいんだけど……んん〜もう少しヒネリが欲しいなア

などと思っていると、桜川さんはそれに答える事無く、すつと俺のほうに来た。

「松田くん、体温計もらうわね。はい、36度5分平熱ね。朝ごは

んは食べられた？」

「はい、全部」

なぜか、桜川さんの顔が赤いような気がするんですけど……

その後、桜川さんはてきぱきと末吉のじいさんの体温計を外して、ノートに記入した。

桜川さんは、その後も食事の量などを聞いてノートにとつていく。にこやかに笑っているけど、高橋さんの方は見ない様になっているみたいだ。

でも、仕事上しかたなく高橋さんの前に行った。

「高橋さん、体温計いただけます」

高橋さんは、わざとなのか自分の膝の上に乗ってる体温計を取ろうとしない。

「桜ちゃんが取ってよ」

俺の方からは、後姿の桜川さんの肩が、ピクツと震えた様に見えるた。

「ほら、俺の近くにきて体温計取って」

高橋さんが、自分のベットをポンポンと叩いた。

「高橋さん、ふざけるのは止めて下さい。私、た、ち看護師は、仕事なんですよ。くだらない冗談や、セクハラもごめんです」

そう言うと、高橋さんの膝の上の体温計をパツと掴み取り、病室を出て行った。

その横顔は、唇を噛締めながら、真っ赤になっていた。

俺は、バカみたいに口をポカンと開けたまま、高橋さんを見ていた。

「坊主……カツコワリイとか思ってたんだろ」

「いえ、そんなことは……」

「いやっいいんだよ、かつこ悪いのは本当だからな……俺、もう一回寝るわ、おやすみ」

高橋さんは、そう言って布団をかぶった。

高橋さんとは、昨日のうちにかなり打ち解けていて、結構いろん

なことを聞いている。

半年前に、バイクの事故で大怪我をして救急車でこの病院に運ばれた事。

ヘルメットをきっちり被っていた為、脳の損傷がなく、骨折や打撲など外傷で済んだ事。

「俺って、昔から運がいいんだぜ！」と自慢してた。

半年も入院していると、病院の中の事はかなり詳しくって、色々と教えてもらった。

でも、その中でいつつも出てくるのは、さっきの看護師の桜川さんの話。

もしかして、高橋さんは桜川さんが好きなのかな……。

そんな事を考えながら、俺はトイレに行く為に病室を出ようとした。

「桜川さん、あなたほどの人が、さっきの高橋さんに対する態度はなんですか。元気なように見えていても、彼は彼なりストレスを抱えているのかもしれないよ」

「……はい」

婦長さんと桜川さんだ。

このまま出て行くのは、ちょっと気が引ける……

「半年もの間、会社を休んでいるし、リハビリも上手くない事もある様だし。少し、考えて対処して下さいね。あなたなら大丈夫ね」

「は・い、申し訳ありませんでした」

桜川さんが頭を下げている。

さっきの声は、かなり大きかったから、きつと廊下まで聞こえちまったんだな、可愛そうに……

ドアの前で固まっている俺に、桜川さんが気がついた。

「松田くん……聞かれちゃったみたいね……」

「いえっ何も……」

「そっ？ それならいいんだけど……」

そう言つて、桜川さんは恥ずかしそうに笑つた。

俺は、何だか余計な事を言つてしまいたくなつた。

「あの……高橋さん、きつとぶざけてるんじゃないと思うんですけど……」

「えっ？」

「いえっあの、その、きつと桜井さんがとっても綺麗だから、仲良くなりた……とか？」

桜川さんは、俺の言葉に、大きく目を見開いた。

「フフフツ。松田クンって面白いのね。あんな人庇うなんて優しいし……」

「庇つてませんっ本当に桜川さんは綺麗だからっ」

桜川さんが、俺の鼻の頭をチョンとつついた。

「あ・り・が・と・う。松田クン、もてるでしょう、優しくて可愛いもん」

「いやっそんなっ」

桜川さんは、俺の手をキュツと握つて握手した。

「患者さんに元気をもらつてるようじゃ、私もまだまだ一人前じゃないわね」

桜川さんは微笑みながら、ナースステーションに入つていった。

俺は、桜川さんが握つた手を、じつと見つめていた。

『私の手は、勇ちゃんから握つて欲しいの』

鈴ちゃんはそう言つてたっけ。

俺は、この前その手を自分から離れた。

あれから、鈴ちゃんは来てくれない……

パサッ

何かが、床に落ちるような音がして、そつちを見た。

「鈴ちゃん……」

制服姿の鈴ちゃんが、そこに立っていた。

鈴ちゃんの足元に、ラッピングされた黄色い小さな包みが落ちていた。

「鈴ちゃん！」

俺を見つめる目は、何故かとても悲しそうだった……

そのまま、鈴ちゃんはくるりと向きを変えて走り去った。

「鈴ちゃんっ待って!!！」

ここで、そのまま帰らせちゃいけない

俺の心の警報がビービー鳴ってる

俺は、自然と走り出していた。

「松田くん！ 走っちゃダメよ!!！」

ナースステーションから、桜川さんが飛び出してきて、俺の腕を掴んだ。

「行かせてっ鈴ちゃんが、帰っちゃう。このままじゃ泣いちゃうんだ鈴ちゃんが!!！」

俺は、必死で桜川さんの手を逃れようとした。

もがいているうちに、看護師さんの人数は5〜6人ほどに増えて、どうにも身動きができなくなった。

「松田さん。傷はまだ塞がっていないんですよ。過激な運動は無理です。わかりますね」

婦長さんが、俺の前に来て真剣な表情で言った。

俺は、素直に頷く事もできず、鈴ちゃんのことを気になってばかりで、落ち着かなかった。

また、泣かせてしまった……

きつと見てたんだ、桜川さんと握手してたトコ

皆には何ともないこともかもしれないけど、鈴ちゃんには凄く嫌な事俺が、他の女の人の手を握るって事……

ごめんね、鈴ちゃん……

今は、追いかけてられない……

「松田くん？ 大丈夫？」

俺の頬を、桜川さんがガーゼで拭いてくれてる？ 何で？

俺は、自分の頬を触ってみた。

涙？ 俺……泣いてんのか？ マジ？

「ありえなーから……泣いてなーし……」

俺は立ち上がると、フラフラと部屋に戻ろうと歩き出した。その俺に、桜川さんが声を掛けて来た。

「ねエ？ 車椅子あるんだけど、散歩行かない？」

「車椅子？」

「ええ、これに乗ってなら、散歩もOKだつて先生がおっしゃってたわ。行きましよう」

俺は、鈴ちゃんを追いかける唯一の乗り物に駆け寄った。

「ほら、焦らないのっ。これも持っていかなきゃね」

桜川さんは、俺の膝に鈴ちゃんが落とした黄色い包みを置いてくれた。

いつのまにか

「8」 ありえなー涙（後書き）

鈴ちゃんが、やっと来てくれたのに、最悪な状態になってしまっ  
どうして、いつもスムーズに行かないんだろう？  
車椅子で、鈴に追いつけるだろうか？

いつのまにか

「9」好きな人？（前書き）

勇は車椅子でエレベーターを降りています。  
直ぐに鈴のいる場所に思い当たりますが？

いつのまにか

「9」好きな人？

ピンポーン

もどかしいほどエレベーターの開くのが遅い感じがする。

早くしねーと鈴ちゃんが帰っちまうじゃネーカ！

早くっ早くって！！！！

俺の身体を気遣って、看護師の桜川さんがエレベーターから車椅子を押し出すのをゆっくりとやってってくれるのは分かるけど、今は急いで欲しい、お願いだっ

エレベーターから出て、周りをキョロキョロと見回した。

鈴ちゃんの姿は見えない。

ふと階段が目に入った。

俺は、車椅子を降りると、ゆっくりと歩き出す。

「松田クンっ」

桜川さんが呼ぶ声を手を上げて止めた。

俺は、そこに鈴ちゃんがいると確信があった……

いや、鈴ちゃんの性格からして、他人に泣き顔を見られるのは避けたいはずだ。

病室近くから走っていったのも階段のある方向だった。

きつと此処だと、思った……

ゆっくりと階段を覗いた……

鈴ちゃんだっ

そつと近付いていく、鈴ちゃんに気付かれる前に、鈴ちゃんを捕まえないキヤ。

階段の下から二段目に腰を下ろして、俯いてる鈴ちゃんの前にかがみこんだ。

「鈴ちゃん……」

名前を呼んだ後、すぐにしっかりと鈴ちゃんの手を握った。

両手をしっかり握って、俺はホッと溜め息をついた。

「勇ちゃん……」

驚いて顔をあげた鈴ちゃんの大きな瞳から、大粒の涙がいく粒もポロポロ零れ落ちた。

「俺から握るのは、鈴ちゃんの手だけだ。この間はゴメン……」

「勇ちゃん……ゆっちゃ……」

「俺から手、放しちまって……もう二度と、鈴ちゃんの手を俺から放したりしないから。泣くな、な？」

鈴ちゃんは、俺の手をギューって握った。

「勇ちゃん……ゴメンね、私のために怪我したのに……お見舞い、遅くなって……」

泣きながら話す鈴ちゃんは、ヒックヒックとしゃくりあげている。「そんな事いって、今日は来てくれたジャン。もう泣くなって、な？ 泣き止むっ」

「うん……勇ちゃん？ 私の事、好き？」

ああ、そんな事、今聞くのかよ。

答えの決まってる事を？ 此処で？

俺は、後ろを振り向いて、桜川さんが聞いてないか確認した。

うまく隠れてるつもりかもしれないけど、制服の裾が見えていますから桜川さん！！

「ここで……言わなきゃ、ダメ？」

鈴ちゃんが、いつものキツイ目で睨んだ。

けど、可愛いですよ、あんたは確信犯だねっ

その目に俺が弱いのが知ってる。

「言わなきゃ、ダメだよ、勇ちゃん」

んん、そうですか、言わなきゃ許してくれないつもりでしょうな鈴ちゃん？

「分かったよ」

俺は、鈴ちゃんの耳元に顔を寄せた。

「好き」

小さな声で言った。

「勇ちゃん、聞こえない。もっと大きな声で言って」  
そうくるかつくう」

「俺は、鈴ちゃんが大好きです!!」  
思いつきり大きな声で叫んだ、これでいいだろ  
俺の大事なお姫様っどうぞだ!!

「私も大好き!!」

鈴ちゃんは、俺にしがみついて叫んだ。

鈴ちゃん、あんた知ってるんですか？ こういう風に抱き付かれると、何処にいたって誰がいたって、俺の心臓がバクバク鳴って、体中が熱くなるって事……

わざと俺を困らせるためにやってるのか？

鈴ちゃんは恥ずかしくないんだろうか？

それとも…… 鈴ちゃんにとっては何ともないことで、小さい時みたいにくまのぬいぐるみ程度にしか思っただろうか？

今も、まだ？

もう限界……です……

「鈴ちゃん、放して…… 誰か来たら困る、ってか恥ずかしいかも」

鈴ちゃんは、その言葉にパツと手を放して階段に座りなおした。

「ゴメン、勇ちゃん」

俺の大好きな可愛い鈴ちゃんは、上目遣いにニッコリ笑った。

やっぱ、確信犯のような気がする……

「松田くん、鈴ちゃん、もういいですか？」

少し落ち着いたと思ったのか、桜川さんが声を掛けて来た。

きつと全部聞いてたよな……むちゃくちゃ恥ずかしいんですけど。今の俺は、真っ赤な顔してる、絶対。

「あつと、鈴ちゃん、こちらはこの病院の看護師さんの桜川さん。

桜川さん、え〜っと俺の彼女つの鈴ちゃんで・す」

桜川さんはニッコリと優しく微笑むと、鈴ちゃんに手を差し出した。

「はじめまして、桜井です。ナースの間で松田くん可愛いって評判なんですけど、鈴ちゃんみたいな可愛い彼女がいたんじゃ、敵わないわね」

鈴ちゃんは、ぎこちなく手を出すと、桜井さんと握手した。

「はじめまして……勇ちゃんが世話になってます」

「はい、お世話してます。看護師としてね」

鈴ちゃんは、はにかむように笑った。

「はい」

「鈴ちゃん？ 鈴ちゃんは松田くんと同じ学年なの」

「はい、学校は違いますけど……」

おいおい、二人は話をしながら階段ホールを出て行った。

ここに残った、俺と車椅子はどうするんだよっ

「ちよつと！ 俺は？」

二人が、少し離れたところから振り返った。

「勇ちゃん、ごめん忘れてた」

「あら、私ったらごめんなさいね」

「何で忘れるかなア、ありえなーし」

俺は、ふてくされて車椅子に座った。

女って、どう言う生き物なんだっ……

何故か、三人で病棟の外のベンチのところまで来ていた。  
なんとなく歩いていたらここだったってどこかな？

相変わらず、鈴ちゃんと桜川さんはおしゃべりを続けてる。

冬だけど、ぽかぽかと日差しが暖かい。

車椅子に座ったまま、なんだか眠たくなってきた……

女同士の話は、おれには分からない事も多いし、興味もなかった

……

「ねエ、桜井さんって彼氏いるんでしょう？　どんな人ですか？」

俺の目が、パチツと開いた。

「いないの……こんな仕事してると中々ね……」

桜川さんが少し困ったような顔をした。

「え？　そうなんですか？　桜川さんならてつきり……ごめんなさ

い……」

鈴ちゃんが、申し訳なさそうにうな垂れた。

「いやだっいいいのよ、いい歳して彼氏いない私が情けないだけだから、ね」

「う、ね」

俺はひらめいた、ここは聞かなきゃいけない、絶対に！

「桜川さん、でも好きな人はいるよね？」

俺の質問に、桜井さんの顔が真っ赤になった。

「……どうして？」

桜川さんは、確かに動揺してるように見える。

「好きな人がいるように見える、から」

そう言った後、俺は少し視線をあげて、病棟の俺達の病室のある

辺りを見上げた。

「ここは、俺達の病室の真下のはずだ。

桜井さんも同じ様に見上げる……」

二人に習って見上げた鈴ちゃんが、ぽつりと言った。

「あの病室から、誰かこつち見てるね？ あの階って勇ちゃんの病室のある階だよね」

一瞬にして、桜川さんの顔は火がついた様に赤く染まった。

「そつそろそろ、帰りましょうか？ 長居しちゃったわね、寒くなってきたわ」

桜井さんがそう言った瞬間、鈴ちゃんが飛び上がった。

「やだ！ 遅刻！ 勇ちゃん、また帰りに寄るね」

鈴ちゃんは、バイバイって言うて手を振って走り去った。

鈴ちゃん？ あんたかなりの遅刻ですよ。

もう、10時ですから……」

ふと見ると、桜川さんはまだ病室を見上げていた。

「9」好きな人？（後書き）

桜井さんの好きな人。

勇が思っている人に間違い無いのでしょうか？

いつのまにか

「10」いくつですか（前書き）

病室に帰った高橋さんは、なんだかご機嫌斜めです。  
なぜか、勇に当たってる気がします……

いつのまにか

「10」 いくつですかっ

「おい、坊主。朝の女子高生はお前の彼女か？」

3時前に、リハビリから帰ってきて直ぐに、高橋さんは聞いてきた。

「はい、彼女ですよ。朝その窓からみてたでしょう」

「ああ、見てたよ。お前の車椅子を押してる桜ちゃんと、お前と手をつないでる彼女をな」

鈴ちゃんは、車椅子に乗ってる俺の手を、ずっと握ってた。

そこまで見えてましたか、って桜川さんが車椅子を押してるのは関係ないでしょう。

「俺の彼女、手をつなぐの好きなもんで……ちょっと恥ずかしいけど、仕方ないって言うか」

「はアゝのろけか！ いいよな若者は、自由だな」

「高橋さんだって、まだ若者でしょう」

高橋さんが、苦笑いをしながら首を振った。

「高校生から見たら、オヤジだろーが。そう思ってたんだろ、可愛い松田くん」

可愛いって言うな。可愛いって！！

「俺、可愛いって言われるの嫌いですからっこれからは言わないで下さい」

高橋さんの表情が、一瞬硬くなったと思ったのは、俺の勘違いか？今は、笑ってる。

「ははっ嫌か……そうだな男だもんな。でもな、可愛い松田クんに優しくしてるナースは気に入らない」

なんじゃそりゃ？

「……」

「フオフオっ看護婦さんは、ワシにもやさしいぞオ。ヤキモチはいかん、ヤキモチはな」

末吉のじいさんが窓際のベットから笑っていた。

「ワシも可愛いかのオ、フォッフオッフオッフ」

じいさん、全くタイミングがいいです。

ナイス!!

高橋さんが、可笑しそうに肩を震わせている。

「じいさんには、敵わんわ。俺、今変なこと言ってるみたいだわ。わりーな坊主」

そう言っただまま、ベットに入って寝てしまうのか、高橋さん。

何か俺に、言いたい事あるんじゃないの？

桜川さんの事とかさ……

聞きたくない？好きな人の事とかさ……

ちよつと教えてあげた方がいいのか？

それとも放っておく？

そつだよな……答えは自分で見つけないと、先に進めない。

でも、ヒントがあれば進みやすいのも確かだ。

俺の場合、周りの皆がヒントをくれていたように思う。

気が付かなかつただけだよ。

ここは、頑張ってみますか……

俺は、高橋さんのベットの横にある椅子に腰掛けた。

「高橋さん、俺の彼女ね、鈴ちゃんって言っただけ……さつき桜川さんにつまんない事聞いちゃって……気まずいつてか、何か申し訳なくつて」

高橋さんは、俺の思ったとおり、反応してムツクリ起き上がった。

「何聞いたんだよ」

ちよつと、ムツとした顔してる。

「彼氏ってどんな人ですか……」

「かつかれし……で？……何て……」

「それがア、いなかつたんスヨ。結構気まずかつたって感じで気になつてるんですけどね」

高橋さんの緊張した顔が、ふつと緩んだ。

「そうか、いなかったのか。そうか……」

高橋さん、真面目に思いつきり分かりやすいですよ。

安堵の表情をしている高橋さんに、今度は詰めを打っておく事にしました。

「でもね、好きな人はいるみたいですよ」

「ホントなのかつ」

慌ててるよ、もう何か可愛いこの人。

「はい、桜川さんの顔にはつきりと書いてありますからね」

高橋さんの眉が、ピクツと跳ね上がった。

「お前、俺をおちよくってるのかつ」

えっ？ おちよくる……いいえ、助けたいと思ってるんですけど。

「まさか、何ですか？」

「桜ちゃんの顔の何処に書いてあるんだよ。いい加減な事言うんじやねーぞ」

ガバツと起き上がった高橋さんは、テレビの横に置いてあったタバコを握ると、松葉杖をついて病室を出て行った。

ありや、何で怒るかなア？

俺の持っついていき方がマズカッタ？

仕方ない、タバコを吸うなら屋上だつて言ってたし、俺も行くつ。ナスステーション前は、見つからない様にしないと。

「ま・つ・だ・君？ 何処いくのかしら？」

その声は、桜井さんですか。

ここは一つ、桜井さんにも来てもらおうとか。

「えっと、屋上に行くつとかと。街の景色を見たいなアと思って」

「あらつダメよ。まだ歩き回らない方がいいのよ」

俺は、少し拗ねたようにふてくされた。

ここは、俺の武器を使うことにしよう、母性本能くすぐり作戦だ。

「もうつ松田クンたら。鈴ちゃんに言いつけるわよ」

それは勘弁してください、絶対にダメだから。

「仕方ない。車椅子に乗りなさい。私もこれから休憩に入るから、

屋上で休憩するわ」

「ありがとう。桜川さん」

さあ、高橋さんと桜川さんをどう接近させるかだな。

って、俺、何でこんな事してるんだ？

それは、今、俺が幸せだから？

いやっ何だか、高橋さんの姿が、つい最近までのもがいてた俺の姿にダブって見えるからだ。

鈴ちゃんへの想いに、押しつぶされそうになりながら周りに助けられて答えを出した、自分の姿を思い出すから。

大人の人でも、恋にもがいたりするんだ。

高橋さんは、誰から見てもきつと桜川さんが好きだって分かる。

でも、当の桜川さんにはそれが分からないんだ。

桜川さんも、高橋さんが好きだと思う。

けど、やっぱり高橋さんには伝わらない。

俺と鈴ちゃんの時と同じだ。

大人なら、もっと簡単にできそうなもんなのになア？

「よいしょっとっ」

エレベーターから降りて、屋上に出るスロープを登る時、桜川さんが重そうに掛け声をかけた。

この病院の屋上は、庭園風になっていて、屋根のあるベンチや、テーブルなんかも置いてある。

昼の3時をまわった時間で、日差しも眩しい。

屋上なので、少し風があつて肌寒い。

「松田クン、寒くない？」

「あつ大丈夫です。ジャンパー着てきたし、桜川さんこそ、このひざ掛け使ったら？ 俺立ってるからつかわネーし」

桜井さんは、ニコツと笑って、俺の差し出したひざ掛けを受け取ると、肩に羽織った。

「ありがとう。また鈴ちゃんに怒られそうね」

「確かに……内緒にしてください」

「はいはい」

俺と桜川さんは、フェンスの近くのベンチに歩いていった。

桜川さんは、腰掛けて膝にお弁当を広げる。

ペタツ コツンツ ペタツ コツン と音がした。

「仲がいいじゃねーか。こんなトコでデートかよ」

高橋さんだ。

姿が見えないと思つてのに、何処にいたんだ？

喫煙場所には見当たらなかったのに。

「また、そんな事をつ……いえつ、えーと高橋さんも来てたんですね。タバコ？ ですか」

「あ？ うん、一本だけな」

朝、婦長さんに注意を受けたのを思い出しているのか、物言いが優しい。

「吸い過ぎない様にして下さいね」

高橋さんが、桜川さんを不思議そうに見つめた。

「嫁さんみたい……」

桜川さんの顔が、みるみる真っ赤になった。

「なッ何言つて……」

「あつ、いや、そうじゃなくて。つて、あゝ」

高橋さんの顔も、真っ赤だ。

この二人は、何をやってるんだらう？

本当に、大人なんですか？

俺は、意を決して聞くことにした。

「高橋さんは、27歳って知ってるけど、桜川さんっていくつなんですか？」

なんじゃ、そりゃっ思つただろ。

でも、俺の中じゃ、この質問は大きい問題なんだ。

だって、あまりにも子供っぽいじゃないか？二人とも。

高橋さんが、いきなり俺に詰め寄った。

「おいつ坊主！ なに聞いてんだよ。失礼だらうがっ」

高橋さん、本気で顔が怖いんですけど……

「桜ちゃんに謝れ!!」

「なっなんでっ……」

「いいからっ謝れ!」

カタンツ 何かが落ちた音がした。

「高橋さんっ止めて下さい。怒るような事じゃないでしょう。相手は高校生ですよ」

俺達の間に入って、桜川さんが高橋さんを押さえている。

「桜ちゃんだつて、嫌だろ。歳なんか聞かれたら」

「いいえ、嫌じゃないわ。それに、あなたには関係ないことです」

「何? 関係ない……」

高橋さんは、松葉杖をしっかりと握りなおすと、すつと後ろに下がった。

「そうだな、関係ないな……ワリイ、最近、俺なんかおかしいわ……」

苦々しげな表情の高橋さんは、何も言わなくなった。

そのまま高橋さんは、クルリと背を向けて屋上を後にした。

「高橋さん……私ったら、また」

桜川さんは、しょんぼりと俯いてしまった。

俺の質問は、そんなに怒られる様なことだったのか?

確かに、女性に年齢を聞くのは失礼だけど

あんなに、それも高橋さんが怒ることじゃない気がするんですけど……

桜川さんが、俺を見た。

「何で? って思ってるでしょう」

「え? あっはい」

さつき、カタンツと落ちてしまったお弁当が、辺りに散らばっている。

桜川さんは、それを丁寧に拾い集めて掃除を始めた。

「私ね、30歳になるの、今月」

いつのまにか

それが？ どうした？ わけわかんねーし……

「10」 いくつですかっ（後書き）

今月30歳になるって、未婚の女性にとっては、結構キツイ事なんですけど……

高校生の男子に分かれてほぅが無理かもね？

「11」 弘弥現る（前書き）

鈴ちゃんが、学校帰りにお見舞いに寄ってくれました。  
幸せのはずの空間は、なぜか？

いつのまにか

「11」 弘弥現る

あの屋上での出来事の後、俺は病室で首を傾げながら過ごす事になった。

確かに、高橋さんと桜川さんは両思いだと思つのに……  
煮え切らないってのかな？

桜川さんの歳のことで、あんなに反応しちゃって、おかしくね？

「ああ、もう、ワツカンねえ」

「何が？」

「ベエ？」

おい、俺、ベエじゃねーだろ、ベエじゃ。

「鈴ちゃん、どしたの？ 学校はって、もう終わったのか、5時だもんな」

鈴ちゃんは、ニッコリ笑って、俺のベットに腰掛けた。

「部活、休んじゃった。弘にいには内緒だよ」

鈴ちゃんは、人差し指を口に当てて、俺の顔に近寄った。

おー！！ 近付きすぎだつて、鈴ちゃんっ

くそっドキドキしてきちまった。

「ストロップ！」

来たか、つて兄貴？ の声……

鈴ちゃんが連れてきたんじゃないみたいだし、何で同じ頃にくるかなア

でも、俺は、怒られるような事は、何もしてないぞ……まだナ

「弘にい、何で？ 今日は一緒に帰れないって言ってたのにイ」

「当たり前だ。俺は下校して直接ここに来るつもりだったからな。

鈴、お前は部活があるだろうがっ何やってる」

鈴ちゃんが、俯いてしまった。

「勇も勇だぞ。鈴が部活を休むような事をさせるんじゃない」

そうか、兄貴は鈴ちゃんが部活を休んだことを怒ってたんだ。

空手バカの兄貴なら、そうでしょうね……  
でも普通、彼氏が入院してたら、毎日でも見舞いに来たいでしょう。

何も言わない鈴ちゃんの肩を掴んで、兄貴がゆるする。  
「鈴、分かっているのかっ」

鈴ちゃんは、何も言わない。

「兄貴さ、ここ病室、大きな声は勘弁してよ。それに、鈴ちゃんのこと怒るの止めてくんないかな。俺の彼女っしょ」

「お前の彼女だから、余計にキツク言ってるんだ。甘やかしたら、ろくな事にならないだろーが」

バシッ

「グホッ」

いきなり、鈴ちゃんが兄貴のミゾオチに突きを入れた。

まさかの出来事に、空手の達人も物の見事にやられた感じ……

「ケホッ何するんだ、鈴」

「弘にいなんか、大ッ嫌いなんだから。女の子の気持ち、全然分かんないくせに、お説教しないで」

確かに、兄貴には女の子の気持ちは分かるはずがない、って俺もだけどさ

「私を守るために、勇ちゃんは怪我したの。私の大事な勇ちゃんが……ちよつとでも、一緒にいたいよ……」

鈴ちゃんの目は、キツと兄貴を睨みつけていた。

その目から涙がポロリと一粒零れる。

兄貴、鈴ちゃんを泣かすのは許さんぞ！！

俺が、怒鳴るより早く、鈴ちゃんが俺の首に腕を回して抱きついた。

「空手なら、これからいつでも、いくらでもやれる。でも、私の為に怪我した勇ちゃんを励ますのは、今しかできない」

兄貴の顔が、ぐつと険しくなる……

大噴火は止めてくれ、ここは病院だ。

「くだらない事を言っただけだ。自分がせねばならん事をおろそかにする理由には程遠いとは思わないのか、鈴」

この件に関しては、鈴に大賛成です、俺は。

「兄貴、これ以上は鈴ちゃんを責めて欲しくない。兄貴が鈴ちゃんを思っただけで言ってるのは分かるさ。でも、これ以上言っただけで、鈴ちゃんを泣かすのは許さない!!」

俺は、兄貴を睨みつけた、本当はちょっと怖いけど、鈴ちゃんの彼氏だ戦うぞ!

兄貴の睨みがキツクなる。

まさか、ここでは殴られないだろうけど、やっぱり怖かったりするんだな……

「あら、男前ね? 松田クンのお友達? それともお兄さんかしら? どことなく似てなくもないわね」

桜川さん、この病室の担当だけあって、グッドタイミングで現れる。

兄貴が振り向いた。

桜川さんが兄貴の真後ろに立っていて、背の高い兄貴を見上げるようにして、ふわりと微笑んだ。

もともと美人なんだけど、この柔らかい微笑みは包み込む癒しを感じるよなア

「あつあつえつあ、弟がお世話になっています。兄の弘弥ですっ!」

ん???????? 兄貴、名前まではいらんしよっ

どうした? 兄貴の顔が赤い……

「そう、お兄さんなのね。ところで、弘弥クン。ながーい人生の中で、立ち止まらなくてはならない事が何度あると思う?」

俺も鈴ちゃんも、兄貴も、同じ様に首をひねった。

何の質問ですか?

「人生の中で立ち止まる?」

兄貴は、真つ赤なままで怪訝な表情だ。

「そうよ、ここはね病院なの。人生の途中で立ち止まる事を余儀なくされた人ばかりよ。望んで、そうなった訳ではないわ」

「はア……でも、そこにはコイツの様に自分の未熟さが原因の者もいます」

俺を指すんじゃないの。

「フツそれは、別の話ね。そうじゃなくて、そんな立ち止まってしまった人達にも、また進み始める時が来ると言う事」

「進み始める時……」

兄貴は、桜川さんの言葉をおうむ返ししている。

「そう、進み始めなくてはならないの必ず。立ち止まる時は、病気や怪我だけじゃなく、色んなところで色んな時にやってきて、同じ様に必ず前に進み始めなくてはならないわ」

兄貴は、黙って桜川さんの話を聞いている。

「此処で、その手伝いをさせてもらってるのが私達ナースです。でも、それ以外の時、此処にいても心の栄養が足りない時、支えになるのが家族だったり、彼女だったりしませんか？」

「はア……」

「じゃア、今、鈴ちゃんが一番に考える事は、彼氏の勇ちゃんのことです。ついで当たり前かもしれませんが。私の立場で言わせてもらえればですけどね」

桜川さんは、余裕の微笑を兄貴に投げた。

兄貴は、見事な上段蹴りでもくらったように、クラクラしているらしい。

こんな兄貴初めて見た……

その時、いつもはあまり病室にいない辻のじいさんが笑った。

「ハハハ、小僧、やられたな？ 桜川さんには敵わんだらう。ワシも敵わん。まあ、長い人生、1週間・2週間、いやいや一年・二年なんぞ、どうにでもなるって事さな。あんたも、ワシぐらいの歳にナリゃわかるだらうよ」

兄貴は、ぼーっとした顔のまま、辻のじいさんを見てから、桜川

さんに向き直った。

その顔は、何かに浮かれたような？ フワフワ浮かんでる感じだ。まさか、初恋とか……一目惚れとか……いわねーよな

兄貴の口がパクパクしてる……!

「看護師さんつすきですつ俺とお付き合ひしてください……!」

なんですとー……!……!……!

「兄貴ついきなり何言ってるんだよ」

前のベットから、高橋さんがガバツと起き上がった。

こめかみに青筋が浮いてる気がする……ヤバイッ

鈴ちゃんも、ポカンと口を開けて、兄貴に見入ってる。

そりゃそうだ、こんな展開、兄貴にはありえねーっしょ

「中々、面白い事になったのオ。そろそろ散歩に行く時間じゃが、このまま見物といくか。さあ、やれやれっ」

辻のじいさん、あんたみたいな食べネーじいを知ってると思っただけど、誰か分かったぞ。

うちの道場の師範だ……あいつも相当、食べネーからな  
って、そんな事はどうでもいい、こっちこっち。

高橋さんが、兄貴をじつと睨んでる。

桜川さんは、高橋さんの視線に気付いてるんだろうか？

兄貴を見上げたままで、固まってるのか？

「プツ、松田クンのお兄さんって、面白い。でも、若い子にこんな事いっっちゃ駄目よ。その冗談、本気にするからね」

桜川さんは、笑いながら持って来たガーゼと消毒液を手に、俺の後ろに回った。

「冗談じゃないです……! 俺は本気でっ」

兄貴の言葉に桜川さんは、ふつと微笑んだ。

その時やつと、兄貴を睨んでる高橋さんに気が付いたようで、俺のガーゼを交換しようとして準備していた手が止まった。

「冗談ではないなら、それは迷惑なだけですよ。私は年下には興味ありません。それも、あなたまだ高校生でしょう。問題外ですよ」

桜川さんは、俺が聞いた事もないような冷たい声で、兄貴に死刑宣告をした。

桜川さん、あんたは罪深い……これが兄貴の初恋だと知ったら……同じ事を言えるんですか？ 俺って兄貴に同情してるかも？ でも、きつとこれは高橋さんが聞いているから……なのかな？

あつても、確か、高橋さんは、27歳だった。

今月、桜井さんが30歳になったら、3つも年下なんだ。

どう言うこと？

年下に興味ないって……

兄貴が、俯いて静かに後ずさる。

「勇……元気でナ。俺は元気にはなれないが、お前は元気になれ……」

「あにき……」

兄貴は、そのまま病室を出て行った。

鈴ちゃんが俺を見た。

「ねエ勇ちゃん、私、弘にい送っていった方がいい？」

鈴ちゃんと離れるのは辛い。

けど、今は兄貴が心配だ。

あのまま、トイレにでも流れちまいそうだ……

初恋を体験して、即効失恋ジャーナ

俺の10年続いた初恋もきつかったけど、報われたから……

「うん、鈴ちゃん頼む。俺、一緒にいてやれないから……兄貴の事、母さんに話して、何とかしてくれるかも？」

「わかったっ」

鈴ちゃんは、ニコツと微笑むと直ぐに兄貴を追いかけてくれた。

鈴ちゃんにとつても、兄貴は鈴ちゃんの兄貴の圭斗にいと同じくらい大事な存在だろう。

頼んだぞ、鈴ちゃん。

つと、こつちだ。

あら？ まだ、見詰め合ってますか……

いつのまにか

「これから、どうなるのかな？」

いつのまにか

「 1 1 」 弘弥現る（後書き）

高橋さんと桜井さん、大人の恋も中々進みにくいようです。

「12」 逃げてんじゃねーよ（前書き）

食えない辻のじいさんは、お散歩好き。  
でも、結構頼りになるかもよ？  
こんなおじいちゃん……。

いつのまにか

## 「12」 逃げてんじゃねーよ

「よつと、散歩に行ってくるか」

辻のじいさんが立ち上がった。

「桜川さん、坊主の頭のガーゼ、早く替えたほうが良いんじゃないか？ ん？」

ニチャーと笑ってから、辻のじいさんは病室を出て行った。

あんた、どこが悪いんだよ？ むっちゃ元気そうだし

「あつ、松田クン直ぐするから、ごめんね」

桜川さんは、慌ててガーゼの交換を始めた。

パサッ

「あらっ？ 何か落しちゃった。あつこれって、朝、鈴ちゃんが持ってきてくれた……」

桜川さんは、鈴ちゃんがくれた黄色い包みを、俺に渡してくれた。「まだ、開けてないのね。どうして？」

鈴ちゃんがくれたお見舞い、何が入ってるか気になるけど、開けない。

「鈴ちゃんと一緒に開けたいから……かもしんねー」

「そう、勇ちゃんは鈴ちゃんが大好きなんですものね」

桜川さん、恥ずかしいから、それ以上は言わないように！

「あんまり言わないで……かなり恥ずかしいから」

「あら、でも鈴ちゃんが言ってたわよ。勇ちゃんは私に10年間初恋してたって」

桜川さんは、トレイを片手に持って、ニッコリと笑ってる。

「そうですよ。10年……片思いだと思ってた」

「凄いな、10年かア」

桜川さんが、想像を巡らす様に溜め息をついた。

そうだ、ついでにいらん世話を焼いてしまえ。

俺は、自分でも天才って思うような作戦を思いついたんだ。

大丈夫かって？

そんなの知るかよっ

やってみるのみっだ。

「ところで、気が付いてますか？ 俺のほづが鈴ちゃんより背が低いって？」

「えっ？ そうなの？ 分からなかったわ、車椅子に乗ってたしね」

「ああ、そっか忘れてた」

クソツ気付いてなかったのか……まア大丈夫だ、このくらい。

ちよつと悲しそうな顔を試みよう。

「そんなに、気にする事ないんじゃない？」

ほら、来た。

桜川さんの優しさを利用する、いいぞ俺。

「いや、小さい時なんか、10cmも低くて、周りからも弟にしか見られなくてさ……」

桜川さんは、黙って俺の話を聞いている。

「今も少しだけコンプレックスなんだけど。鈴ちゃんも、背の事気にしてるのかな？ どう思う？」

桜川さんは、ん〜と考えてからやさしい顔になった。

「鈴ちゃんは、勇ちゃんを好きなんでしょう。勇ちゃんは鈴ちゃんが好き。だから、背の事は関係ないんじゃないかな」

「やっぱり、優しい桜川さんのことだから、きつとそう言うと思っただ。」

でも、ホントにそうですか？ じゃア、桜川さんは？ 何を気にしてるの？

ホントは高橋さんが好きなのに、年下は興味がないなんて言うっておかしくない？

俺は、そこが聞きたかった。

聞きたいけど、聞かない。

それは、俺が聞くことじゃない。

兄貴、ごめんな、兄貴の初恋は応援できそうにない……

何も言わないまま、桜川さんをじつと見つめた。  
ガタンッ

高橋さんが、松葉杖を出して立ち上がるうとしてる。  
高橋さんが、こつちをみた。

「じゃあ、桜ちゃんは何を気にしてるわけ？」

そつだ、高橋さん、あんたが聞かなきゃ！！

「……」

「タバコ吸ってきますわ」

おいつ、なに逃げてんだよっおっさん！

あんたが逃げたんじゃ、俺のせつかくの作戦が台無しだろう。  
人の気も知らないでっ何やってんだよ。

所在無げに桜川さんは、その後姿をただ見つめていた。

しゃーないなア、この大人達はよオ

「桜川さん、女の人って30歳になると、好きな人に好きって言っ  
ちやいけないの？」

桜川さんは、ビックリして俺を振り返った。

「なに？ 松田くん？ 何言っ……」

「大人って、回りくどい？ 疲れるっしょ」

少し怒ったように、桜川さんはトレイを持った手にギュツと力を  
入れた。

「歳の事だけじゃないのよっ。彼は患者さんで、私は看護師でっ……」

「関係ねーんじゃねー、さっき桜川さんが言ったんじゃん」

桜川さんは、真っ赤な顔になったまま、病室を出て行った。

種は、撒いたぞ、って俺は何者だ？

でも、これ以上はこんな俺にはどうしようもない。

後は、本人がガンバンなきゃな。

食事も済ませて、のんびりしていると親父が来た。

「勇、変わりないか？ 淋しくて泣いてないだろうな」

「アホか。おっ寿司？ 買ってきてくれたんだ。サンキュー」

親父は、持った寿司折りを俺のベットの簡易テーブルに置いた。

「何言ってる、これは父さんのだっ！ なんちゃって」

「父さん、面白くないからっ」

「スマン。まっ食べ、父さんのおごりだ」

俺は、若者ならではの食欲で、夕食後のデザートよろしく寿司を食べ始めた。

「んぐツモグ。あつ父さん、今日さ兄貴、モグツ初恋したんだけど、見事に振られたから慰めといてよ。かなり落ち込んでるだろうからさ」

親父は、キョトンとした顔をして俺を見た。

「勇は知らないのか？ 弘弥はずいぶん昔に初恋は終わってる」

「ほえ？」

俺は知らないぞ！

兄貴が……あの兄貴が、いつ恋をしてたんだ？

いつだ~~~~！！！！

「母さんの話だと、小学校に入る前だ。1年間も、ってお前には負けるか。でも、1年間も片思いしてて、その子が男の子だと気付いて恋が終わったって聞いてるぞ」

「男だつて？ 気が付かなかつたのかよ！」

「ああ、鈴ちゃんのお兄ちゃん圭斗くんだ。可愛い顔しててな、勇も覚えてるだろ？ 女の子みたいだった」

俺は、頭を抱えた。

兄貴……俺でも知ってたぞ、圭斗にいが男ナぐらい始めからナ。  
1年間……不毛だ……

圭斗にいは鈴ちゃんによく似ている。

睫毛が長い黒い瞳、サラサラの髪の毛、ぷっくりした唇。

確かに、確かに可愛いさ。

でも、直ぐにわかるだろう……

別の意味で、兄貴は凄いよ。

「痛い兄弟だな、俺と兄貴って」

「だなっ、かわいそうかもな。でも、お前は良かったな。鈴ちゃんが女の子で」

親父は、俺を見てニヤツと笑った。

「当たり前だろう」

前を見たら、高橋さんが肩を揺らして笑ってる。

「お前の兄貴、痛いわホントっ」

「高橋さんっあんま、笑わないで下さいよ。幼稚園の頃の話ですか  
」ら

高橋さんは、ヒツヒツと笑いながら、手を顔の前で合わせて謝っている。

「おッ俺タバコ、行ってくるわ」

「吸いすぎには気をつけてって、桜川さんが言ってませんでしたっ  
け？」

「知るかつ」

高橋さんは、怒ったように言うと、そのまま病室を出て行った。

俺は、フーツと溜め息をついた。

「あの人、ここは長いのか？」

親父が聞いてきた。

「うん、半年になるって。仕事も辞めさせられそうだって言った  
な」

「そうか……こんなご時世じゃ仕方ないかもしれんな………かわいいそ

うに」

「でも、また他の会社探せばいいじゃん」

親父は、首を振った。

「そんなに甘くはなかるう。どんな仕事をしてるのかは知らんが、最近再就職もままならん世の中だからな」

「そうなんだ……」

「平気そうにしているても、結構焦ってるんじゃないのかな。余裕のない顔つきだった」

俺は、親父の言葉に、今朝の婦長さんと桜川さんの会話を思い出していた。

ストレスって、リハビリが思うようにいかないだけじゃないんじゃないか？

仕事のこと、この先のこと、桜川さんのこと……

全てが、高橋さんの思い通りに進んでないんじゃないかな？

結構キツイ……んだ

「さっ、父さんは帰るな。勇も、それ食べたらゆっくり休みなさい」  
じゃアっと手を振って、父さんは帰って行った。

「12」 逃げてんじゃねーよ（後書き）

高橋さんのストレス。

高校生の勇には分からなかった事。

桜井さんは、分かっているんでしょうか？

いつのまにか

「13」 クマの顔の帽子（前書き）

鈴ちゃんの手作りの可愛い帽子。

高橋さんに笑われても、勇は脱ぐ気は全くない。

勇ちゃん、あんたは偉い！

いつのまにか

### 「13」 クマの顔の帽子

高橋さん、そんなに笑わなくてもいいだろうっ

「止めて下さいよ。笑うのはっ」

「だって、お前……それはないだろう、ヒッヒッヒ、クマって帽子になるもんか？」

「鈴ちゃんの手には掛ければなるんですよ」

そう、今日の夕方に学校帰りの鈴ちゃんが来た時、昨日の朝に買った黄色い小袋を二人で開けたんだ。

入っていたのは、鈴ちゃん手作りの「クマさんの顔の帽子」で、前面にクマの顔が編みこんであって、後頭部にはまーるい尻尾までついている。

この尻尾なんか、真ん丸くする為なのか、毛糸の密度がかなり高くて、帽子が後ろに垂れ下がるくらい重いんだ。

そりゃあ、高校生のそれも男が被るような物ではないのは、俺にだって分かってるさ。

でも、鈴ちゃんが、嬉しそうに恥ずかしそうに被せてくれたんだ。脱ぐなんて事、俺にはできない。

それは、鈴ちゃんに対する裏切りだ。

鈴ちゃんは、俺の頭の傷を気遣って、俺が入院した初日から、初めての編み物に挑戦してたんだ。

だから、お見舞いになっただって中々来られなかったって言うてた。

どこに、こんなに可愛い事をしてくれる彼女がいるんだ？

クソッ、まだ笑ってるよ。

「でも、坊主、お前って結構似合ってるかもナ。可愛いワ」

「可愛いって言わないでよ。気にしてる」

「気にしてるのか？俺はまた、武器にしているのかと思ってた」

「んな訳ないでしょ。小さい時から、鈴ちゃんの弟に間違えられて傷ついて、鈴ちゃんからはぬいぐるみのクマ扱いされて……」

高橋さんは、笑うのを止めて、俺のベットの所まで来ると、足元に座った。

「ぬいぐるみ扱って何だ？」

「鈴ちゃんは最初、俺がぬいぐるみのクマに似てたから好きになったんですよ……今は、違いますけど」

高橋さんは、真面目な顔で俺の事をじっと見つめた。

「お前は、間違ってる。今もぬいぐるみだよお前は」

「……」

くっそつ、また大声で笑って。

真面目な顔で、何を言うのかと思えば、人をからかって。

ストレスを、俺で晴らしてんじゃねーぞ！

「高橋さん、いいですか？ これでも俺は信念を持って、この帽子を被ってるんです」

「信念って、大袈裟だろう……」

俺は、首を大きく横に振った。

「いや、大袈裟じゃない。俺は、鈴ちゃんが泣くのは嫌いなんです。泣かせる事はしないって決めた。それを心に決めて、10年間生きてきたんだ」

高橋さんは、片眉をあげて首を傾げた。

何だか、馬鹿にされてる気がしてきた。

「俺がどんなに辛くても、どんなに悲しくても、恥ずかしくても、鈴ちゃんが泣く事は絶対にしないんです。この帽子を被らないで、鈴ちゃんが泣くなら、俺はこの帽子を一生でも被り続けるんですよ」

一気に、言っちゃったぞ。

どうだ、高橋……！

「くっだらねー。泣いたら、泣かしとけ。何でもかんでも、女の言いなりになんかなくてんじゃねーって。黙ってるっぐらい言っちゃりゃいいんだよ」

ガバツ

とっさに、俺は起き上がった。

俺の拳は、高橋さんの顔面から1センチの所で止まってる。

「坊主……何のつもりだ……」

俺の寸止めの突きにも、高橋さんは動揺した気配がない……

何者だ？ この人？

俺は、突きには自信のある……結構速いし、素人さんには恐怖だと思っただけ……

「この拳、下ろさないのか？」

俺は、高橋さんの淡々とした声に、力が入っていた拳を下ろした。

「坊主、少し腹が立ったぐらいで、こんなんじゃ、まだまだ危なっかしいな？ また、喧嘩になっちまう」

何が、少しだっ……俺にとっちゃあ、10年間の想いを否定されたようなもんだぞ。

でも、確かに、直ぐにかつと来るのは、直さないと同じことの繰り返しだ。

これじゃ、鈴ちゃんは守れないな。

「すみませんでした、高橋さん」

「いや……俺も、大人気なかつたかもな。スマン、からかつた様なこと言っつて」

俺達は、お互いのお顔を見てどちらからともなく笑った。

「でもね、高橋さん。俺、鈴ちゃんの頼みごとでも、それが鈴ちゃんの為にならないことなら、鈴ちゃんが泣いたとしても、言う事は聞きませんよ」

高橋さんが、ニヤツと笑った。

「そうか？ さっきのお前の勢いなら、何でも言う事ききそうだけだな」

「いや、鈴ちゃんを守るためなら、彼女が泣く事になっても、俺は言う事をきかない」

そう、クマの帽子を被るぐらいのことなら、いつでも聞き入れるさ。

鈴ちゃんが、笑っていてくれるなら、それが一番いい。

満足そうに言った俺の胸を、高橋さんがポンツと叩いた。

「くだらん事なら、何でも彼女の言う通りか？ それもいいのかもな？ まア俺にはできないがな」

「できないですか？」

高橋さんの顔が、少し歪んだ。

「ああ、言う事を素直に聞くことは、自分の方が下だって認めてる気がする……バカだって分かってるけどな……」

それって、桜川さんの事かな？

年下だから、余計に突っ張っちゃうのか？

俺が、鈴ちゃんの弟に見られないように、偉そうな態度とってみたりしたみたいにか？

そうそう、前はよくやったよ。

はつきり返事しないと、無視してみるとか、しゃべる時はあくまでも上から目線とかさ。

でも、結局、好きな気持ちには勝てないんだ。

俺は、何となく開いてるドアの方に視線を向けた。

あれ？ ドアの横にナースの制服の裾？

それは、あなた、もしかしなくても桜川さんでしょ。

ナースシューズに桜マークを付けてるのは桜川さんしかいない。しっかし、隠れるのヘタクソな人だなア。

いつのまにか

「13」クマの顔の帽子（後書き）

こっそり隠れて聞いている桜井さん。

この後、いったい何を聞くことになるんでしょう。

いつのまにか

「14」 夢見てたこと（前書き）

いつもふざけた感じの高橋さん。

勇は、その本当の姿をまだ知りません。

いつのまにか

「14」 夢見てたこと

俺は、この際、一気にこの大人たちの恋を進めてやる事にした。俺って、おせっかい？ だって、仕方ないじゃねーか。

入院生活は、暇なんだから。

「高橋さん、今言ってた、自分が下って認めるのが嫌な相手って、桜川さんの事？ だよな」

やった、俺。

聞いたぞ！

どうするよ、おっさん。

答えは？

「……」

こたえは?????

「高橋さん？」

「俺って……そんな、分かりやすいか？」

プツ。何言つての、分かりやすすぎるし。

誰にも分からないなんて、思ってるんじゃないよな……ある意味、兄貴に近い天然だ。

「多分、分かりやすいと思うけど……」

「そっか……」

高橋さんは、俺のベットに腰掛けたままうな垂れた。

こんなに自分の気持ちを表に出してて、それに気付いてないって、どんな奴だよ。

高橋さんは、くいつと顔を上げると、俺をじっと見つめた。

「実はな坊主。いや、松田クン。俺は桜ちゃんが好きなんだ」

だから、分かってるって。

「はい、知ってます」

「そっか……そうなんだ、知ってたのか。でもな、年下で仕事も首になりそうな男を、桜ちゃんはどう思ってるかなあ？ って思うと

……」

高橋さんが、またうな垂れた。

もう、うっとおしい。

はつきり本人に聞けよ。

いい歳した大人だろう……大人だからかな？

俺達みたいな高校生と、大人って何が違うんだ？

年齢？ 仕事？ 責任？ 社会的地位？ お金？

ん〜イマイチよくワカンネーな。

あっそうだ。

この人、何の仕事してんのかな？

「高橋さんって、仕事なにしてんの？」

高橋さんが、はっとした様に顔をあげて、片方の眉をピクツと動かした。

「それが、何か関係あんのか？」

「いえ、そうじゃないけど……何か気になって」

はんつと高橋さんは笑った。

「消防士だよ」

「しょうぼうし？ ってあの火を消す？」

俺は、あまりのギャップに変な声を出してしまった。

「どこの世界に、火い付けて回る消防士がいるんだよ」

「イヤッそうじゃなくってっ、えっと、そのう……」

高橋さんがクツクと笑った。

「らしくネーんだろ。いつつも言われてた」

「……」

はい、そうですねとは言えねーよな……

でも、マジで軽い感じだし、人様の命を助ける仕事に就いてるとは、思いにくいよな。

これって、絶対先入観だよな、ごめんなさい高橋さん。

「っで、今回の事故で完全には元通りにならない身体になりまして、現場復帰できなくなりました。事務方に回される」

「どういう事？　ですか？」

「首になりそうだって言ってたじゃないですか」

高橋さんは、ひどく辛そうな顔になった。

「お前が鈴ちゃんを想ってたよりも長い年月を、俺は消防士にあこがれて過ごしてきた。数年前にやっと念願かなって消防士になったんだよ。それが……」

俺のベットの上に置かれてた足を、高橋さんはキツク握った。

その目には、怒りのような感情が表れているみたいだ。

「俺は、自分自身で掴んだ夢をぶち壊した。バカなんだよ。現場に出られなくて、何が消防士なんだ」

この人は、もしかしなくても、今、どん底なんじゃないか？

なのに、いつもは結構陽気にふるまってた。

それは、強さからくるもの。

本当は強い心があるから、できること。

でも、今は、助けて欲しいと、もがいてるんだ。

でも、俺には……まだ何も知らない子供の俺には、掛ける言葉も見つからない。

助けてあげられないよ、高橋さん。

「あらっ随分と弱気なのね？　高橋さん」

え！！　桜川さん、今入ってきますか？

「クソッ、何が言いたいんだ。桜ちゃんには関係ないだろう」

高橋さんは、桜川さんを睨みつけてる。

桜川さんは、そんな事は気にする様子はない。

冷ややかな視線を高橋さんに投げてる。

「関係あるわ。あなたって私の事が好きなんでしょう」

「！！！！」

高橋さんは固まった。

「私の事を好きなら、うじうじしないで早くリハビリでも何でもして、その足を治しなさい。治らないわけではないわ。時間が掛かるだけ、先生もそうおっしゃったはずだわ」

高橋さんがいきなり立ち上がった。

「時間が掛かるって、それが問題なんだ！俺達の仕事は身体が鈍っちゃお仕舞いなんだ。人の命に関わるんだぞ。半端じゃいられない」

詰め寄る高橋さんの胸に、桜川さんは人差し指を突き立てた。

「半端じゃいられない？もう既に半端じゃない。消防の仕事は現場だけではできないでしょう。事務方や、署内に勤める人間がいればこそ、現場の消防士は働けるんだわ。それが分からなければ、あなたは半端よ」

桜川さんの言葉に、高橋さんは押し黙ったまま何も言い返さない。いや、言い返せないのかもしれない。

きつと、桜川さんの言った事は当たってることだから……

「あなた、長い年月を夢見てきたって言ったじゃない。その年月を自分を鍛えてきたんでしよう。今からも鍛え続ける、いつの日か復帰できる時まで。その時までには、裏方で消防を支えなさい」

高橋さんは、自分の胸に突き立てられた、桜川さんの指を食い入るようにつめていた。

俺は、息をするのも忘れて見入ってた。

「いつか……復帰できる時まで……消防を支える……」

「そうよ。あなたなら、必ずできるはずでしょう。この私が好きになった人だもの」

あらっ？桜川さんまで、言っちゃったよ。

高橋さんは、また固まってる。

「好きになつた人？……」

おっさん、あまりの事に理解不能か？

って思った瞬間、高橋さんは速かった。

さすが、消防士、動きがいい！

「キャッ！……」

桜川さんは、高橋さんに抱きしめられて真っ赤になってる。

はいはい、お幸せにっだ。

「痛つて〜〜」

「どうぞやら桜川さんが、高橋さんの無事だった方の足を踏んづけたみたいだ。」

「ここは病院です!! あなたって人は!!」

「看護師が暴力ふるっていいのかよっ」

「いいんです、あなたは私だけの患者ですから」

「あーあ、高橋さん、あんた前途多難だよ……いいのか？」

「ホントに……？」

「14」 夢見てたこと（後書き）

こころって時に、女は強い。

特に、好きになった男のためなら、なんだってできちゃうかも？

それは、若くても、ちよつとお姉様になっても同じかも？

勿論、おばさんになってもですけど。

「15」 将来の夢（前書き）

相変わらずの鈴ちゃんと勇。

可愛い鈴ちゃんと、恐い鈴ちゃんに、振り回されざみです勇ちゃん  
は。

いつのまにか

## 「15」 将来の夢

病室の俺のベットにの横に立って、鈴ちゃんはクマの顔の帽子の位置を直していた。

「勇ちゃん、寝る時には脱いでもいいんじゃない？」

そう言っても、学校が終わってここに来た時、俺が帽子を脱いでたら、あなたは怒るんでしょうが。

「うん、でもさ。脱いだらお前怒るだろ？」

「怒らないわよ。そんな事で」

って、ほら睨んでんじゃなーか。

鈴ちゃんの大きな目は、口よりももっとたくさんの情報を俺に与える。

怒ったりはしなくても、この帽子を被ってない俺を見たら、きつと悲しくなるんだろ。

分かってるさ、それぐらい……

「まア、この傷が治るまで、きつちり被ってるよ。お守りだからな」

鈴ちゃんの顔が、ニツコリして緩んだ。

「勇ちゃん、お散歩行こう」

「うん、そうだな。車椅子は使わなくてもいいんだ。歩いていける。検査結果も異常なし、観察経過良好で今朝から散歩の許可が下りてる。」

「本当！ じゃア行こう」

鈴ちゃんは、喜んで病室を出た。

「勇ちゃん早くー!!」

「はいはい」

俺が、歩いてもいいってことは、鈴ちゃんにとって凄く嬉しい事なんだと、実感する。

自分を守ろうとして怪我をしたって思ってるもんな鈴ちゃんは……俺が、バカだったただけなのに……

ドアを出たところに鈴ちゃんが待ってた。

俺は、鈴ちゃんの手をそっと握った。

「行こう、鈴ちゃん……」

「うん……」

鈴ちゃんは、俺の手をギュって握り返してきた。

実を言うと俺は、鈴ちゃんの細くて白い手を握るだけで、今でもドキドキする。

一回しかしてないけど、キスした時だって、身体全部が心臓になったみたいにドクンドクンドクンだった。

いつか、慣れるときが来るんだろうか？

いつ見ても、鈴ちゃんは何でもない様に見えるし、俺だけなんだろうな……こんな……

好きの度合いが、俺のほうが強いのかも……

まア、それでも仕方ないんだけどな。

俺と鈴ちゃんは、病院の裏庭に続く小道を歩いている。

あまり意味の無い話をしながら歩いていると、鈴ちゃんがいきなり笑い出した。

「ねエ知ってた？ 弘にいの初恋の相手が、圭斗にいたって」

「あア、親父に聞いた、この間。結構ウケルヨナ、兄貴も」

二人でお腹を抱えて笑った。

「そつだ、勇ちゃん。弘にいね、大学行かないって言ってるらしいよ」

えっ？ 俺は初耳です。

「なんで？ 大学行って空手続けるって言ってなかったっけ？」

「ん〜それがね、県警に入って、地域の安全を守りたいとか何とか言い始めたみたいで……」

そつか、母さんが鈴ちゃんママに相談に行つたな。

「母さんに聞いたんだろ」

「うん。おばさん困ってるみたい。弘にいつて一度言い出したら聞かないところあるし」

そつだろつな。

頑固だからなア、警察官になるのは大学卒業してからでもいいんじゃないのか？

何でだろつ、兄貴はどうしていきなり警察官になろうと思ったんだろつ。

ん？ ドツカで聞いたぞ、警察官になるとか何とか……

「あつ！！ 思い出した。兄貴の子供の頃の夢だ！」

「えっ？ 警察官？……そう言えば……でも、どうして今になつて？」

あの一直線人間が……考えそうな事。

桜川さんに失恋して、小さい頃に圭斗にいにも失恋した事でも思い出したんだろつな。

「失恋の思い出が、兄貴に思い出させたんだよ。小さい頃の夢までさ……」

そつだ、そうに違いない。

思い立ったら吉日つてのが兄貴のモットーみたいなもんだからな。だから、桜川さんにもいきなり告つて失恋してんだもんな。

「……そんなの、有りなの？」

「兄貴なら、有りでしょう」

鈴ちゃんと俺は、二人で大きく溜め息をついた。

それから、どちらからともなく、笑いがこみ上げた。

「母さんや親父には悪いけど、可笑しいわ」

「そうね……ねエ、ところで勇ちゃんの夢は何？ 小さい頃のこと意味だけど」

「言えませんか、と言うか……恥ずかしいので」

「もう、叶ったからさ」

「そうなの？ 何になりたかったの？」

「だから、言えませんでした」

鈴ちゃんが、思いつきり繋いでいた俺の手を振り回して言った。

「私はね、勇ちゃんのお嫁さん。って、今も同じだけど」

えっ？？？？ そうなの？

意外だ……鈴ちゃんなら、もっとしつかりとした将来の夢を持っていると思ってた。

「そうだよな、誰かのお嫁さんなんて……俺は嬉しいけど」

「そうじゃない気がする。」

「何か、意外だな、鈴ちゃんらしくない……」

「何？ 勇ちゃんは嫌なの？ 私がお嫁さんじゃ、嫌なの？」

いや、そうじゃない……

「違っつて、あの何て言うのかな……夢って誰かの何かになるんじゃないって、自分のものってかさ」

鈴ちゃんの黒くて大きな目が、俺を睨みつけてる。

「じゃア、勇ちゃんのは？ 勇ちゃんの小さい頃の夢は？ 今の夢は？ 言いなさいよ」

歩くのを止めて、鈴ちゃんは俺に詰め寄ってきた。

こうなると、鈴ちゃんはスツゴイ怖い。

白状しないと収まらないんだ。

「小さい頃は、鈴ちゃんの好きな男の子になりたかった！」

一気に鈴ちゃんの目に輝きが戻った。

嬉しそうに、少しだけ笑った気がする。

が、まだ許してくれてない気がする。

「で？ 勇ちゃん。今の夢は？」  
「やっぱり……」

「今の夢は……何にもない……」  
「何か俺って、情けなくねーか？」

鈴ちゃんの『勇ちゃんのお嫁さん』を、違うとか言ったくせに  
自分は、何も無いって、俺ってバカか……  
偉そうな事、言うんじゃないか。

鈴ちゃんが、握ってる俺の手をそっと撫でた。

「なんだ、勇ちゃんも何もないんじゃない。私も同じだよ」

「えっ？ でも、俺のお嫁さんになるんだろ？」

鈴ちゃんは、ニツコリ笑ってからフフフツ含み笑いだした。

「そ・れ・はア、ずーっと先の夢。その前にある夢は、私も決まっ  
てないよ。勇ちゃんと同じ」

「そっか……やっぱり鈴ちゃんは、しつかりしてる。」

「じゃあ、俺もずーっと先の夢は、鈴ちゃんをお嫁さんにすること  
だ」

「勇ちゃん大好き！」

鈴ちゃんは、俺にしがみ付いた。

周りに少しだけ人がいて、皆が俺達を見てる。

「すごく恥ずかしいんですけど、鈴ちゃん……」

「ねエ、鈴ちゃん。ここの先に静かなところがあるから、そこ行か  
ない？ ここじゃさ……」

「えっ？」

鈴ちゃんも、周りの状況に気付いて真っ赤になった。

「うん、そうだね……」

いつのまにか

「15」 将来の夢（後書き）

高校1年生、  
まだまだ将来の明確な夢なんて持てないかもしれませ  
ん。

いつのまにか

「16」 ラブシーン(前書き)

裏庭のひと気のないところにやって来た、勇と鈴ちゃん。  
二人つきりになれるはずが、思わぬ先客が？

いつのまにか

## 「16」 ラブシーン

さつき居た小道からずつと入った所に小さな裏庭がある。前に、高橋さんに聞いていたんだ。

外来診察室を回り込んだ場所だから、一人になりたい時には最高だつて。

普通に散歩するのは、表の遊歩道がついてる庭だから、その裏庭には、ほとんど来る人もいないし、見られるような窓もないって言うたのを思い出したからだ。

えっ？ 何を考えて、ひと気のない場所に行くかつて？ 別に、やましい事なんかないぞ。

キスでもできたらラッキーとか……少し思ってたりするけど……付き合ってるんだから、それぐらいはいいじゃないか！

俺は、いったい誰にいい訳をしてるんだらうな？

「ねエ、勇ちゃん。ここつて誰もいないよ」

鈴ちゃん、気付きましたか……まずい？

「えっ？ だつて、たまには二人つきりつてのも……よくない？」

鈴ちゃんが、大きな目でジッと俺を見つめてから、腕を絡めてきた。

「そうだね。病室じゃあ、いつも誰かいるもんね」

「そうそう」

上手くいった、ここなら誰にも邪魔されず……

つて、何で？

「あっ……」

鈴ちゃんが、小さな声を上げた。

角を曲がろうとして、俺達の目に飛び込んできたのは、高橋さんと桜川さん。

それも、こともあるうか、ラブシーン真っ最中。

桜川さんを壁に押し付けながら、抱き込むようにしている高橋さん

んの片手は、しっかりと桜川さんの首の後ろを支えていて、逃がさないようにキスしている。

そのキスも、お互いを貪るように濃厚なもので、俺なんかエロ雑誌でしか見たこともない凄いやつ。

勿論、動いてるし、知ってる人のなんて見たことない。

当たり前か……

高橋さんの、もう片方の手が、桜川さんの白衣の胸元からスルリと中に入り込んだ。

その時、少しだけ放された桜川さんの口から吐息が漏れた。

それを聞いた瞬間、俺の身体は心臓に変わった。

頭の中から、ドクンドクンと音がする。

いつの間にか、思いつきり、鈴ちゃんの手を握りこんでいた。

そのうち、高橋さんはエスカレーターとしてきて、自分の完治してない方の足を、桜川さんの足の間に入れ込んだ。

桜川さんは、身をよじったけど、高橋さんは逃がすつもりはないし、桜川さんも本気で逃げようとしているわけでもなさそうだ。

俺は、その光景に身を硬くしたまま、全身に血が駆け巡る感覚に見舞われてる。

このまま見てはいけないと分かっているのに、俺は動けない。食い入るように、見つめていた。

初めて見るそれは、俺の脳みそも完全に沸騰させているみたいだ。「いこう……」

鈴ちゃんは本当に小さな声で言うと、俺の手をグイッと引く張った。

俺は、引きずられるまま鈴ちゃんについて行った。

鈴ちゃんに引きずられながらも、俺の頭の中は、今の光景が焼きついて離れない。

走ってはいないものの、もの凄く速い足取りで鈴ちゃんは突き進んでいく。

病院の中に入って、長い廊下を歩き、何度も曲がって誰も居ない

外来内科の奥にある階段まで行き着いた。

「はアはア……………」

鈴ちゃんも、俺も息が上がってる。

俺の息が上がってるのは、早歩きのせいではないと思う。

鈴ちゃんも？

鈴ちゃんも同じなんだろう？

「ゆう……………ちゃん、…ハアハアハア……………凄いトコみちゃっ!!」

俺の頭の中で、鈴ちゃんの息遣いと桜川さんの吐息が重なっていった。

そう、俺は今、鈴ちゃんの首の後ろに手を持って行って、鈴ちゃんに激しいキスをしてる。

もう何が何だか分からない。

いや、分かるうとしてない俺がいる。

俺は、たださつき見た光景を繰り返すように、鈴ちゃんにキスし続けた。

鈴ちゃんが欲しいと思った。

鈴ちゃんの全部が知りたいと思った。

無我夢中で、俺はもう片方の手を、鈴ちゃんのコートと制服のジヤケットの下に滑り込ませようとしていた。

「ダメッ!!!!」

俺の手は、鈴ちゃんと繋がれたままだったから、その行為は先には進めなかった。

俺の唇から逃れた鈴ちゃんは、大きな声で叫んだんだ。

真っ黒な大きな瞳から、大粒の涙を流しながら、俺の手を押し戻している。

「い……………や。勇ちゃん……………ダメだよ……………」

鈴ちゃんは、俺の手を放してその場にうずくまってしまった。

俺は何をした？

高橋さんと桜川さんのラブシーンに煽られて、大事な鈴ちゃんに何をしたんだ……………

俺はっ、俺から鈴ちゃんを守らないといけないみたいだ。  
なんて馬鹿なんだろう、これじゃア、兄貴や母さんが心配するの  
も当然って訳だ。

ガシッ！！

「……………」

「勇ちゃん？……………何して……………」

俺は、目の前にあった壁に思いっきり突きを入れていた。  
拳から血が流れて、壁を伝い落ちてる。  
痛いかって？

痛いさ、でも、鈴ちゃんの心より痛くないはずだ……………」

「鈴ちゃん……………ごめん、俺…オレ…ごめんな鈴ちゃん……………」

鈴ちゃんの手が、俺の拳を包み込んだ。

「鈴ちゃん……………俺って、自分自身から鈴ちゃんを守らなきゃなんね  
ーみたいだわ」

鈴ちゃんは、小さく横に首を振った。

「ごめんな。泣くほど嫌な事しちゃって……………鈴ちゃんを泣かせたく  
ないのに、いつつも泣かせちゃう」

「ちがつ……………」

「いいや、違わない。俺はバカだ。鈴ちゃんの彼氏でいる資格なん  
て無いのかもしれない」

鈴ちゃんは、俺の拳に添えた手に、額を押し当てた。

何かを考えてるような、言い出しにくいことを告白しようとして  
るような……………」

まさかっ俺ってここで振られるとか？

何か有り得る気がしてきた。

だって、鈴ちゃんは結構気まぐれで、すごく我儘なときがあるか  
ら……………」

でも、今回は俺が悪いんだから、仕方ないのかもしれない。

そうか？ 本当に仕方ないですませていいのか勇！

やっと、初恋が実ったのに……………」

いつのまにか

それも10年越しの恋なの？

でも、今は何も言えない、言っではいけないことをしちまったんだから……

この鈴ちゃんの沈黙が、今の俺にはかなりキツイです。

「16」ラブシーン（後書き）

鈴ちゃんは、一体何を考えているんでしょうか？

勇は、反省しているようですが、こう言うことって、頭で考えるより、行動しちゃうのが若さだったりするものだしね？

いつのまにか

「17」 誓い（前書き）

激しい大人のラブシーンを見てしまった二人。  
頭の中が飽和状態の勇は……？

いつのまにか

「17」 誓い

鈴ちゃんの額に、俺の拳の血がついてる。

それでも顔を上げようとせず、ポタポタと床に涙を落としてる。

こんなに長く泣き止めないほど嫌な事を、俺は鈴ちゃんにしたんだ……

どうすればいい？ 何を言えばいい？

何も言えない……

俺が黙っていると、鈴ちゃんはフーツと大きく息を吐き出した。

「違うの……私、あのね……」

鈴ちゃんの顔が、見る見る間に真っ赤になった。

「私ね、胸がね……小さいの……勇ちゃんは大きい胸が好きなんです……」

「えっ????」

何を言ってるんだ鈴ちゃん？

今は、そんな話じゃないだろう。

ここでそれを言われても、答えられない。

この間から、ずっと気にしてたのはそのせいなのか？

「だから、勇ちゃんに触られたら、嫌われると思ったのっ」

「……………」

鈴ちゃん？ 何て言いました？

そりゃ確かに、小さいよりは大きい方が、俺は好きかもしれない？

だからと言って、鈴ちゃんの胸が小さかったとしても、どうして嫌いになる？

どうやったって、俺が鈴ちゃんを嫌いになるなんて、有り得ないでしょう……

そんな事も分らないのか？

「勇ちゃん？ 何も言ってくれないんだ……やっぱり小さい胸は嫌いなんだね……」

どうしてだ！ どうしてそうなる、そりゃ、直ぐに答えられない俺も悪いけど……

答えにくいんだよな、恥ずかしくて。

何も答えない俺を前に、鈴ちゃんは、また泣き始めた。

俺の苦手な鈴ちゃんの涙。

鈴ちゃんの涙の前では、俺は無力です。

答えればいいんでしょ！ 答えれば……

「鈴ちゃん、俺ね、鈴ちゃんの胸が好きなんじゃないって。鈴ちゃんが好きなんだ。そんな事も分からないのか？」

鈴ちゃんが、泣きながら顔を上げた。

「分からないよ……勇ちゃんのこと、好きな気持ちが大きくなればなるだけ、不安なんだよ」

そうなんだ、俺もそうだ、鈴ちゃんを好きな気持ちが大きい分、嫌われたら……多分、生きてられない。

想いが通じたと思ったからこそ、募る不安なのかもしれない……

「鈴ちゃんの胸が小さくても、大きくても関係ない」

「本当？ 勇ちゃん……」

俺は、鈴ちゃんの額についた自分の血を、親指で拭き取った。

鈴ちゃんの顔に、血なんて似合わないから。

「鈴ちゃん、俺って10年間も鈴ちゃんを好きだったんだぞ。それにしちゃあ、信用無い気がするけどな？」

鈴ちゃんは、曖昧な笑顔になった。

笑っているのか、泣いているのかよく分からない。

理解してくれてるといいけど……

もう少し、ちゃんと言わないとダメなのかなア

「鈴ちゃん？ さつきはごめんな。俺って欲張りみたいだ」

「欲張り？」

鈴ちゃんは、可愛い顔で首を傾げた。

むっちゃんくちゃ可愛いです。

「ああ、鈴ちゃんに想いが通じたら、今度は鈴ちゃんの全部が欲し

「なくなった」

俺の言葉に、鈴ちゃんは真っ赤になって、目を見開いた。そのまま、俺に寄りかかった。

「全部……勇ちゃんにあげてもいいよ……」

鈴ちゃんは、俺の首元で小さく呟いた。

鈴ちゃん、これは反則ですからっ

俺の欲望が、またムクムクと頭と身体を支配していく。

ダメだぞ俺！！

絶対にダメなんだからなっ！

俺は、大きく首を振って邪念を追い払った。

鈴ちゃんにも、その振動が伝わったらしい、身体を放して俺を見た。

「大丈夫？ 勇ちゃん？」

少し平静を取り戻してから、俺は鈴ちゃんの手を握った。

「鈴ちゃんを全部もらうのは、今じゃない。俺たちのまだ決まってる夢が叶った先の事」

鈴ちゃんの顔がふくれ面になった。

「それって、結婚してからってこと？ そんなのずーっと先じゃない」

「ずーっと先では不満なんですか？ 鈴ちゃんはかなり積極的なんではないだろうか？」

もう少しだけ先って言った方がいい？

いいや、ここで折れてはいけない気がするぞ。

「ずーっと先でもいい。俺は、鈴ちゃんをずーっと好きなままだから」

「そんなに我慢できるのかなア？ 勇ちゃんスケベな本ばっか読んでしょう」

「……………」

そうきたか、男の子の生理現象をどうしろってんだ。

でも、なんと言われようと、もう浅はかな真似はしないって決め

たんだ。

エロ本と友達だろうが、ほっといてくれ。

それで鈴ちゃんの将来が守れるなら、ずーっとエロ本と親友でも我慢してやる。

無理かもしれないけど……

「無理かもしれない……もっと早く鈴ちゃんの全部を欲しくなるかもしれない」

「……そうだったら？」

「その時は、もらっちまうから覚悟しろ」

「そう……」

鈴ちゃんが、握っていた俺の手を、鈴ちゃんの胸の上に持っていた。

俺の掌を広げ、鈴ちゃんは俺の手で自分の胸を包み込ませるように、あてがった。

「じゃア、誓って。ずーっと私の全部は勇ちゃんのもだった。そして、勇ちゃんの全部は私のものだった」

鈴ちゃんの胸は、本当に小さかったけど、ブラウスやブラジャー越しでも、とつても柔らかくて、温かった。

これが、俺の大好きな鈴ちゃんの胸……

スツゲー感激だっ！！！

「勇ちゃんっはやく誓って！」

おっと感じに酔いしれている場合じゃないんだっ。

誓うって、スツゴク恥ずかしいけど、ここは我慢。

誓わないと、恐ろしい事になりそうだ。

「はい、この先ずーっと俺の全部は鈴ちゃんのもので、鈴ちゃんの全部は……俺のもの」

大好きな鈴ちゃん、いつか必ず俺のものにするぞ。

鈴ちゃんは、俺の誓いを噛締めるように添えていた手に力を込めた。

「私も、誓います」

鈴ちゃんがそつと目を閉じた。

俺は、吸い寄せられる様に、鈴ちゃんにキスをした。

さっきの様な、激しいものではなくて、優しい温かいキス。

「鈴ちゃん……大好き」

「ゆう……ちゃん……だいす……き」

俺たちは、ずっと身体を離して、手だけを握り合った。

「鈴ちゃん、いつか大好きから、愛してるに変わったら、その時は我慢できない気がするよ。俺……」

鈴ちゃんが、優しく微笑んだ。

「私も……いつのまにか愛してるに変わったら、勇ちゃんのものになりたい」

そうだな、いつのまにか……だな、俺たち。

いつのまにか

いつのまにか

「17」 誓い（後書き）

大人なのか、子供なのか？  
誓い合う二人は可愛らしいです。

「18」 辻のじーさん（前書き）

勇と鈴ちゃんは、病室に帰ってきますが、そこには当たり前ですが、高橋さんが待っていて……

いつのまにか

「18」 辻のじーさん

しばらくブラブラと病院内をうろついてから、俺と鈴ちゃんは病室に帰った。

当たり前かもしれないけど、高橋さんが病室に帰ってた。

「よう、デートか？ 若者はいいいねエ元気で。寒くないのかよ」

そりゃアあんたでしょうが！！

「高橋さんこそ、寒くなかったですか？」

「……………」

俺は高橋さんとにらみ合う形になった。

高橋さんは、俺たちに見られたなんて知らないはずなのに、不機嫌そうに片方の眉をあげた。

鈴ちゃんが、慌てて俺と高橋さんの視線の間に入った。

「勇ちゃんっ疲れたよね。ベットで休んで、ね」

高橋さんが、俺がベットの前に立ったとき、何かを投げってきた。

「これっ」

ビックリだ。

俺は、自分の頭を触った。

勿論、そこにあるはずの「クマの顔の帽子」はあるはずがない。

だって、今それは俺の手にあるんだから。

「どこで……………」

高橋さんはクククククツと笑った。

「裏庭の手前。坊主、覗きはよくないぞ。まア勉強になったらいいんだがな？」

俺と鈴ちゃんは、二人してゆでだこみたいになってる事だろう。

さっきの光景が、鮮やかによみがえる。

「覗いたんじゃない。あんなトコで……………あんな事……………してるなんて」

「思わなかったか？ だよな。俺もそう思うわ。でも、我慢できなくてナ。子供にはキツカッタかもな」

何がキツカタかもだつキツスギルツテ！！

そう思うなら、これからは慎めよな、オッサン。

「ところで？ お前達はどこで何してたのかな？ 最近の若者は、結構ませてるからなア」

何言つてやがる、このオヤジは。

バカにしたような顔して笑いやがって、ムカツク。

「何も……それに、高橋さんには関係ないことだし」

「そつ、やるだけの根性はなかったか。それとも、まだまだお子様か、彼女もお子様そうだしな」

高橋さんは、意味ありげな視線で、鈴ちゃんを下から上に見た。

俺は自然に拳を強く握つてた。

「何言つてやがるっ！！ 鈴ちゃんを変な目で見るなっお前には関係ネーだろうがっ」

俺の身体は、とつさに高橋さんに向かって動き出してた。

「やめんかつ！！」

俺の腕を握つたのは、いつもの散歩から帰ってきた辻のじーさんだった。

「はつはなせつ！ 俺だけじゃなくてっ鈴ちゃんまでバカにするなんてっ」

「いいから。やめるんじや。お前さんの敵う相手じゃないわ」

辻のじーさんは、俺を鈴ちゃんの方に押し戻した。

「その、ちゃんぽらんそう男はな、10年前の空手の高校インターハイ総合優勝者じゃ」

何？ 空手の高校インターハイ？ 総合優勝つて、まさか？

「あの時のお前さんは凄かった。個人形・個人組手・団体戦形・団体戦組手、全てを掻っ攫つていきおつたな。まさか、その後空手をやめるとは思わなんだがな」

高橋さんつて、凄いんだ……何だか、兄貴みたいだ。

兄貴だつて、周りの環境さえ整つてれば、総合優勝だつてできたはずだ……

って、で、何でじーさんがそんな事知ってたんだよ？

高橋さんも疑問に思ったらしい、キョトンとした顔をしている。

「じーさん？　なんで俺の過去を知ってる……」

辻のじーさんは、フンツと鼻を鳴らすとニカツと笑った。

「あの時の総監査役に、わしもはいつておったんじゃよ。勿論、覚えとらんじゃろーがな、お前さんは」

うつそく、マジ？　まさか、うちの師範も知ってるなんて言わなねーよな……

「そうそう、クマ帽子の坊主、お前さんのとこの柴本師範は元気にやってるみたいじゃのオ」

「やっぱり……ん？　元気にやっテルみたいって、おかしくないか？　最近、会ったのか？」

入院してからは、俺でも会ってないぞ。

勿論、見舞いにも来てくれないし……

「そんなに不思議そうな顔をするな。お前さんの見舞いには来なくとも、ワシの見舞いには来たぞ。お前さんが、この部屋に替わった日にナ」

「そうなのか、そんなに親しいんだ。」

「そうそう、お前さんを探しとつたみたいだったな」

辻のじいさんは、俺の顔を見てニカツと笑った。

それは、もしかして俺の見舞いに来たんじゃねーのか？

「そうそう、お前さんにもやっつけてくれて言われとつたんじゃがな、全部食ってしもつたわ。つるりと旨いプリンじゃったわ」

「ジジイッ、それって俺の見舞いじゃねーのかよ」

「ふおおおお、気にするな。若いもんが細かい事を言うでない」  
話になんねー。

このじーさん全部分かってやってる、確信犯だ。

その時、鈴ちゃんが俺の腕を引いた。

「勇ちゃん、辻さんに失礼な言い方は止めた方がいいんじゃない。師範に怒られるよ」

「でつでもつ……」

そうか、そうだな……年齢からいつても、空手界の上下関係から見ても、このじいさんの方が上みたいだしな……

「伊原鈴くん。そんな気は使わんでいいぞ。わしは柴本には何も言わん。プリンも食ったしな。ふおふおふお」

やっぱ俺の見舞いじゃネーカ。

それに鈴ちゃんのフルネームまで知ってやがる。

食えネージジイだ。

「ところでな、高橋卓巳。この敷地内で今日のような良からぬ事はせんことじゃ。誰が見とるか分からん。桜川さんの立場も考えてやらんとナ」

「……………」

高橋さんが、唇をぐつと噛んで頭を下げた。

もしかして、反省してんのか？ 今のじいさんの一言で？

高橋さんが、少しだけ頭を上げた。

「申し訳ありませんでした……この事は内密にしていただけですか？」

辻のじいさんは、高橋さんをチラリと見ると、ホホンツと笑った。

「何かおごつてくれるか？」

「もつもちろんですつ」

なんだっそりゃ！！

俺は思わず怒鳴った。

「そつそんなん有りかよ。いや、有りえねーだろ」

「あるなア、賄賂というやつだ。勉強が足りんぞ小僧ふおふおふおなになが賄賂だ。」

「じいさんに賄賂渡してどーすんだよ高橋さん」

高橋さんが、渋い顔になった。

「渡さなきゃなんないの。桜ちゃんの為に、俺が悪いんだから……彼女に迷惑はかけられない。辻のじいさんには特にな……」

ん？ 辻さんには特に？ って何だ？

「あああーーーー！！！！この病院って辻総合病院だ。じーさん親戚か？」

じーさんの眉が両方上がった。

「いや、わしは顧問じゃ。息子は院長じゃがな」

じゃあ、何で大部屋なんだよ……

普通、そんな人が入院するのは個室だろーが。

「何で、こんな部屋に？」

「面白いからのう。ふおふおふお」

あー、さぞかし面白いでしょうよ……

鈴ちゃんが、俺の後ろでクスクスと笑ってる。

いつのまにか

「18」 辻のじーさん（後書き）

食えないじーさんは、総合病院の院長のお父様でしたか。

だからと言って、勇の大好きなプリンを食べてしまうなんて……ね

エ

いつのまにか

「19 退院の日（前書き）」

やっと退院です。

お世話になった、同室の人たち、さよならですね。

いつのまにか

## 「19」 退院の日

俺は、この日やっと退院することになった。

検査や、経過観察で10日ほどだったけど、少し後頭部の傷が痛むだけの俺には、結構退屈で長い時間だった。

でも、この病室の面々は、そんな俺の退屈をやわらげてくれたのは間違いはない。

いまこの時も、目の前でいちゃついている、高橋さんと看護師の桜川さん、肩書きの多い辻のじーさん、ちよつとポケをかましてくれる末吉のじーさん。

退院できるのは嬉しいけど、この3人と別れるのは、少し寂しい気も？ しねーよ……絶対イ

「勇ちゃん。入院費払ってきたよ。これおつりね」

鈴ちゃんだ。

仕事が休めなかった母さんに替わって、預かってきたお金で入院費を払ってきてくれた。

今日が土曜日でよかったなア……

本当なら、兄貴が来るのが当たり前なんだろうけど、兄貴は、桜川さんに失恋してから、見舞いにも来なくなってるから仕方ない。

まア、俺は鈴ちゃんのほうが嬉しいに決まってるから、いい。

鈴ちゃんは、この前の初デートの時と同じ白いハーフコートに薄いブルーのセーターを着て、グレーのミニスカート黒のブーツを履いていた。

最後まで過ごせなかったデートの朝を思い出してしまった。

着替えが済んでる俺も、他にまともな服は持ってないって事もあるし、デートの時と同じ服装だ。

まるであの日のままで、鈴ちゃんと俺は見詰め合って笑い出した。「勇ちゃんの着替え、おばさんに頼まれた時に中見たんだ。だから、私も同じにした」

鈴ちゃんは、これ以上ないって笑顔で俺を見つめてる。

「あの日と同じで、すっげー可愛い」

「もう、勇ちゃんっ大好き」

鈴ちゃんが、俺の腕にしがみ付いてニコニコしてる、この状況が俺が一番幸せだ。

鈴ちゃんに向かつて、俺も満面の笑みで答える。

その時、辻のじーさんがいつもの散歩から帰ってきた。

「この様な男女を、最近ではバカツプルと言うそうじゃのう」

クソツ大きなお世話なんだよクソジジィ

「あつと、辻のじっ、いや、辻さんお世話になりました」

「ほう、もう帰るのか。退院するのは晩になってからかと思っただのにな」

んな訳ねーだろーが、普通は早く帰りたいもんだって。

「そんなに急がなくても、よかるうに」

辻のじーさんは、何だか淋しそうな顔をしてる。

憎まれ口と思っただのは、勘違いなのかな……

「まっ帰る家に待ってる家族がおれば、帰りたいかな……ワシも……」

俺は、ずっと気になってた事を聞くことにした。

「えつと、辻さんはどこがってか、あゝなんて言えばいいのかなア。どうして入院してるんですか」

俺が居る間に、院長が回診に来た意外は、じーさんの家族は病院には来ていない。

まア、院長の回診の時も、散歩に出ている、じーさん自身はこの病室にはいなかったけど……。

辻のじーさんが、チラリと俺を見て、可笑しそうに笑った。

「ね・ん・ざ、じゃよ。手首のな」

「てっ手首の捻挫アゝ。ありえねー」

辻のじーさんは、手首をブンブンと振った。

「ほら、折れてグラグラじゃろーが。家に帰っても、何もできんか

らな」

いやいや、折れてないですから。

折れてたら、そんな事できませんから。

呆れ顔で辻のじーさんを見つめる俺の腕を、鈴ちゃんが引っ張った。

「勇ちゃん、もういいでしょ。辻さんは此処が面白くていいって言ってたんだよ、ねっ」

「ほれほれ、勇ちゃんっ鈴ちゃんに気を使わせちゃいかんぞ」

辻のじーさんは笑ってる。

「ワシはな、今年の春に家内を亡くしたんじや。家には誰もおらん。息子の嫁とも折り合いが悪くてな……まアなんだ、我儘ジジに振り回されて、息子の嫁も困り果てたんじやろーナ」

俺って、イラン事を聞いてしまったみたいだ。

じーさんの行動や、じーさんの状況を見てたら、分かっててもよさそうなもんだよな……

奥さんも、他の家族も誰も来ないんだから……

「ワシは、家内に頼りすぎておった。アレがおらんようになってから、ワシの人生も終わったようなもんじやな。まっ、お前さんには、関係のない話よ」

関係ないさ。

でも、こんなに元気なのに、病院なんかに入りっぱなしは良くないってのも、確かなんじやネーカ？

たとえ、奥さんが先に死んじやったとしても、本当にこのままでもいいんだろうか？

こんなじーさんが、必要な時ってあるような気がする。

食えねージジイだけどな。

「辻さん、俺、あのおう思うんですけど、辻さんを必要とする場所っていうか、俺らみたいなのに、空手を教え続けるのも有りなんじやないかなって……」

その時、末吉のじーさんが、辻のじーさんを睨んだ。

「若い者がいつまでこんな所におるんじや。はよう元気になってシヤバに出ないカンのう」

そう言つて、末吉のじーさんは窓の方を向いてしまった。

病室の空気が、何とも言えないおかしなものに変わった時、言いくそうにしながら、今までイチヤイチヤしていた桜川さんが、改まった口調で辻のじーさんに言った。

「辻さん、院長がばやいていらつしやいました。俺には診察やら手術やら、やらなくてはならん事が多過ぎる。親父が手伝つてくれなくなつて、医者の仕事に専念できん。つて」

辻のじーさんの耳がピクツと動いた。

「空手の指導も、病院経営も、引退したんじや……やる気がおきんでな……」

俺の影から鈴ちゃんがヒョコツと顔を出して、辻のじーさんを見た。

「私、もしも……私がいなくなつて勇ちゃんが、辻さんみたいになつたら、勇ちゃんを嫌いになります。天国で浮気しちゃうかもつです」

天国で浮気つて、鈴ちゃん、ちよつと飛躍しすぎでは？

でも、死んだ後に浮気されたら、もの凄く辛いかも？

キスとかどーすんのかな？ いやいや、そんなの、されたら困ります。

絶対にダメだからね、鈴ちゃんは。

辻のじーさんの肩が震えてる。

まつまさか、泣いてる？

「ブワァ〜ハハハハハハ、いつ伊原鈴、天国で浮気か？ 一本取られた気分じや」

鈴ちゃんを見たら、恥ずかしそうに俯いてしまった。

このジジイ、俺の鈴ちゃんを笑いやがってっ

せつかく心配してたのに、この仕打ちは許せん！

でも、鈴ちゃんの発想も可らしいから、怒るのもなア……

腹を抱えて笑ってたじーさんは、目尻の涙をシワだらけのゴツイ指で拭き取った。

「それは、嫌じゃな……これでもワシは家内を心から愛しておった。浮気をされては辛すぎるのう」

目尻だけだと思っていた涙が、辻のじーさんのしょぼしょぼの小さな目からポロリと零れた。

「もう一度、戻ってみるかの。生の世界へ……生きていると実感できる、お前さん達の様な奴らのいる場所にナ。末吉さんにもしかられたしなア……ハハッ」

「じーさん、頑張れよ」

俺の言葉に、鈴ちゃんが、何かに気を使っているような、困った顔をして、俺の背中をパンツと叩いた。

そうでした、じーさんなんて言っちゃいけない人でした。

「申し訳ありません。辻さん……じーさんなんて言ってしまうて。

うちの師範には、内緒に……」

「いや……いい。お前さん達二人からは、じーさんと呼ばれるのも良からう」

辻のじーさんは、これまでよりもスッキリした様な顔で、笑っている。

俺の大好きな鈴ちゃんは、俺以外の人間にもキツイ蹴りを入れられる様だ。

愛情たっぷり蹴りだけど……鈴ちゃんは、心の優しいキツイ女の子。

そこが、すごく好きなトコ、鈴ちゃんに言われて、辻のじーさんが元気になってくれる事を祈ろう。

すごく愛してた人に、先に逝かれてしまったら……

俺は、どうやって過ごすんだらう……

ふとそんな事を考えた

でも、そんな事、現実的でなくて、答えなんて出てこない……

俺の人生の中で、鈴ちゃんがないなんて、ありえないから……

いつのまにか

「19」 退院の日（後書き）

辻のじーさんの心に、新たな力が沸きあがっているといいんですけど。

いつのまにか

「20」 いつのまにか（前書き）

クマの顔の帽子を被せられた勇。

鈴ちゃんは、その場で固まってしまいました。  
何故ですか???

いつのまにか

「20」 いつのまにか

それから、俺たちは、末吉のじーさんと高橋さんにも挨拶をして、病室を出ることにした。

鈴ちゃんが、最後に俺の頭にクマの顔の帽子を被せた。

何故か、そこで鈴ちゃんは固まった。

「……………」

「……………」

「勇ちゃん……………いつのまにか？」

「何が？」

「背……………伸びた」

「べ……………！」

「背が伸びた??????」

「ホント……………」

「ホントだ……………鈴ちゃんの目が、俺と同じ位置にある……………」

「いつのまにか、伸びてたんだね。何かくやしい……………」

「へ？」

「くやしいって、あんた……………本気でそんな事を？」

「今までの俺のコンプレックスを考えたら、言えないでしょう。」

「いや……………、負けず嫌いの鈴ちゃんなら有り得るかも……………」

「でも、俺は……………うれしいんですけど……………」

「そうなんだ、あゝあ、いつまでも可愛い勇ちゃんのはずだったのに、残念」

「残念？」

「なんだよ、それ！」

「まさか、嫌いになるとか？」

「どうすんだよっ、嫌われるくらいなら、背なんか伸びなくたって

いいのにつ……………！」

「鈴ちゃん……………」

鈴ちゃんが、俺の頭に手を置いた。

「嫌われるかもって思った？」

「……………」  
クスツと鈴ちゃんが笑った。

「それじゃあ、この間の私と同じだよ？」

「この間の、鈴ちゃん？」

「この間……………、小さい胸……………」

「あつ……………む・ね……………」

鈴ちゃんは、慌てて俺の口を押さえた。

高橋さんが、ブツと噴出した。

「この間の事を、高橋さんに相談してたんだっけ、ヤバイかもっ

「勇ちゃんっ！！！！！！」

鈴ちゃんが、高橋さんと俺を交互に見て、怒鳴った。

俺は、唯一の荷物である大きなスポーツバッグを手に取ると、走って逃げ出した。

「この場合は、とにかく逃げた方がいいに決まってる。」

誰もいない所で、ゆっくり謝れば、鈴ちゃんも許してくれるよな

……………

「いやっ、知らない誰かっつのがいたほうがいいのか？」

俺が、鈴ちゃんの胸が大きくなるのかっつて、高橋さんに聞いたなんて、高橋さん以外知らないんだから。

高橋さんのいる場所から、早く遠ざけねば！

あのオッサンは、またイラン事を言いかねない。

「勇ちゃん！！！！」

鈴ちゃんが、俺の後ろを走って追いかけてくる。

追いつかれたら怒られるに決まってるのに、何故か俺はそれが嬉しいみたいだ、ニヤニヤと顔が緩む。

鈴ちゃんをずーっと追いかけてきた俺が、今、鈴ちゃんに追いかけられてる。

俺だって男だ、伸び始めたら背だって直ぐにもっと伸びる。

鈴ちゃんよりもずっと大きくなって、鈴ちゃんをしっかりと抱え込みたい。

細くて、自分より小さい鈴ちゃんを、すっばりと包み込めたら……そんな事を考えながら、飛ぶように階段を駆け下りて、玄関の自動ドアをくぐった。

振り向くと、鈴ちゃんが自動ドアの向こうに迫ってる。

ドアが開いて、鈴ちゃんが俺に飛び掛ってきた。

俺は、それを両腕に受け止めて、ギュッと抱きしめた。

「鈴ちゃん、俺のこと大好き？」

「大っ嫌いっ、この間のこと高橋さんに話したんでしょっつー！」

「ちよっと、相談しただけ。女の子の気持ちとか分かりにくいからさ……」

俺の手から逃れようとする鈴ちゃんを、もっときつく抱きしめた。折れたりしないように、気をつけて、だけどこれ以上ないって位にきつく

俺の想いが、鈴ちゃんに届くように。

「鈴ちゃん、大好き」

鈴ちゃんの動きが止まった。

「勇ちゃん……ずるいよ。こんなトコで……皆、見てる……」

俺は、いつも鈴ちゃんにやられる事をお返ししてる。

皆が見てるトコで、ラブラブしていると、恥ずかしくってたまらなくなる。

その効果を利用して、今回は鈴ちゃんに怒られないようにしようと考えた。

「鈴ちゃん？ 恥ずかしいなら、もう怒ってないって言って」

鈴ちゃんは、フーツ溜め息をついた。

「怒ってない……」

だって、今日はこの後楽しく過ごしたいから。

浅はかだった俺のせいで、途中で終わってしまった大切な日のやり直し。

俺は、少し勿体無かったけど、そつと腕を放した。

「よかった。さつこのまま、初デートの続きに行きますか」

俺の言葉に、鈴ちゃんの顔がパツと明るくなった。

「うんッ行く」

きつと鈴ちゃんだつて、この日が来るのを楽しみに待っていてたはずなんだ。

俺は、鈴ちゃんの手をキュツと握つて、自分のジャンパーのポケットと一緒に入れた。

「勇ちゃん……大好き」

「よかった、嫌いなままじゃなくて」

「嫌いになんか、ならないよ」

いつのまにか、鈴ちゃんの手を握る事が自然になった。

いつのまにか、俺の背は鈴ちゃんと同じになった。

「勇ちゃん、いつのまにかズルクテカッコよくなったね」

そうなんだ、いつのまにか鈴ちゃんの機嫌を取るために俺は少しだけ、ずるくなった。

カッコよくなった？ ってのは、鈴ちゃんのヒイキ目かな？

いつのまにか、俺たちは成長していく

いつのまにか、俺たちの恋も、愛に成長していく

いつのまにか、そうなったら

俺たちは、その時……心も体も、一つになれる……

いつのまにか、それが俺と鈴ちゃんに一番ふさわしい

いつのまにか、だな……



「20」 いつのまにか（後書き）

ご愛読、ありがとうございました。

小3のわが息子の恋が叶う事を夢見て執筆してきました。

今はまだ可愛い恋も、いつのまにか悩んだり、苦しんだりする時が来る事でしょう。

その時に、傍にいてやれる自信のない病持ちの母親です。

周りの人たちが、息子を助けてくれる事を願って……最終話まで書くことができました。

読んでくださった皆様に感謝しながら、読者数に励まされた日も多かったです。

本当にありがとうございました。

もし、よろしければ、評価・感想など頂けましたありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって  
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1586d/>

---

いつのまにか

2009年3月24日09時22分発行